

質問項目	グループ A	グループ B
事前指導	養①：県の養成協議会で⁽¹⁴⁾共通の手引きを作らせておられます。そちらのほうに沿って授業をしております。こちらのほうは、⁽¹⁵⁾実習の意義、⁽¹⁶⁾目標、準備物で、⁽¹⁶⁾実習生の心得ということで現在特に言われています⁽¹⁷⁾守秘義務などをやらせてはいただいております。 本学では保育所実習の中でも一番初めの実習になりますので、やはり⁽¹⁸⁾マナーや⁽¹⁹⁾実習に向けての心得というところからやっているのが現状になります。 実習につきましては種別がさまざまありますので、⁽¹²⁾種別の違いを学生には伝えていき、そして実習に向けて取り組んでいくというような形になります。 正直なことを言いますと、種別ごととにさまざまな利用児者の方がおられます、その⁽³⁰⁾全ての方に対応した、統一した授業をするということが難しいのが個人的な課題とは思っております。 その中で、本学は⁽²⁸⁾介護福祉養成もありますので、<u>その教員とも連携して、知的障害児者が必要になってくる⁽¹¹⁾車いす、移動介助、食事介助等、そういうふうな生活支援</u>については、そちらの教員の方と連携を取りながら説明をしております。 あとは、児童福祉施設全般において、実際に現場に行くのが理想ではあるのですが、本学は 140 名ほど学生がおりまして、その学生が施設に行きますと、やはり施設側のほうが、利用児者の方が落着かなくなってしまうので、⁽¹⁹⁾ビデオを見ていただく。あとは直近では、10 年来的先輩で、現在、⁽²¹⁾児童福祉施設で働いている先輩に来ていただき、<u>現場の様子や実習生に望むことを話していただいている</u>ような形となっています。一応、そういう形で本学としては事前指導をしております。 養②：私どもも、基本的には県の某協議会で作成している⁽¹⁴⁾手引きに沿って内容的には進めております。 必須の内容としては、⁽⁹⁾基本的なマナーと、それから⁽¹⁷⁾守秘義務とその責任に関する事項というの徹底していくようにしております。それから、⁽¹²⁾実習課題の設定に力を入れるようにしております。それから⁽¹³⁾日誌の書き方というところ。大きくは、この 4 つが課題になっているところなんです。 私どもの場合ですと、工夫している取り組みとしては、現場などの職員の方と。現場体験としては、⁽¹⁵⁾見学実習ということで、前年度に障害系の施設と児童自立支援系の両方にお伺いして、そちらの業務を教わらせていただくのと、それから、それぞれの⁽¹⁷⁾施設の実習担当の職員の方から「実習に向けて、こういうことにぜひ取り組んでほしい」ということをお話しただきます。その後、前年度の実習経験者である⁽²⁰⁾先輩たちの発表を、後期が	養①：短大の養成校の場合、保育士の実習とはいえ、⁽³¹⁾知的障害の施設がほとんどになっている。今までの生活の中で、障害をお持ちの方に接する機会がほとんどないので、1 年生の夏に、1 日以上、自分で⁽¹⁶⁾ボランティア先も開拓をして向う。まず「見てくる」体験をし、その⁽²³⁾体験を基に、障害についての講義を事前指導の中に入れる。 また、⁽²⁰⁾施設の職員の方に講話を頂いて、⁽¹⁹⁾視聴覚教材を使いながら、様子を見せていただき、どういうふうに通コミュニケーションを取るかとか、こういうときにどうするか、施設の实習では、こんなことを体験してほしいというようなお話を頂いている。 養②：独自の科目として、2 年次に〇〇演習という科目を、1 年生の後期と 2 年生の前期に設けている。 その授業の中で、保育士がいる⁽¹⁹⁾施設でのボランティア体験というものを行っている。授業の中で、1 年生の後期から、⁽²⁰⁾現場職員の話も含めて行っているが、春休み期間中にボランティア先を自分で見つけ、自分で交渉して、⁽⁴⁾「こういうボランティアをしてみたい」ということを先方にちゃんと交渉をして、自分の意思を伝えて、5 日間以上という期間を設けて体験している。 学生は保育所を選ぶケースが多いが、ボランティア体験をした後の「〇〇演習 2」という授業の中で、それぞれ体験してきたことを持ち寄って、グループで話し合っていて、それで、⁽²²⁾施設ではどういう子どもたちが生活していて、どういうふう保育士がそれぞれ支援しているのかということいろいろいると話し合ったり、「自分はこういうふう動いたんだけれども、いろいろ不十分な点があった」なんていうことも含めて話し合う。 ボランティア先を選ぶときに、「保育所ばかり行かないように」と指導する。結構、乳児院とか、障害者関係の施設とか、いろいろな施設、児童養護関係の施設ですとかも、全体の 1 割ぐらいはそういうところで体験してくる。グループ分けをして、振り返りをして、次の保育実習指導 1 のほうにつなげていく。 必ず⁽⁹⁾オリエンテーションまでに、自分なりの実習目的を作って、それを携参して、現場の先生に提出するようということを課す。ただ、それは、現場の先生からすると、まだとても抽象的な目標だと思います。 実習に出す前には、保育実習の大まかな目的としては、⁽⁸⁾施設の働きを理解、そして、⁽⁹⁾施設における保育士の、あと、⁽¹⁰⁾子どもも理解、そこでもたちが、どういう状況を生きてきた子どもたちがどういうふう生活しているのかという子どもも理解、あとは⁽⁹⁾保育士の専門性の理解、「この 3 本は必ず大事なことだからね」ということを言って、それに即した形で目標を立てて、それを実習担当教員がやりとりをして、チェックをして、それで修正させて持

	終わる時点で、⁽²⁴⁾ポスター発表という形で、次年度の予定者は、見学の後、その発表を聞きまして、春になって自分たちも希望する施設を決めていくというような形で、⁽⁴⁾できるだけ自分たちの「こういうことを学びたいから、ここに行きたい」ということを⁽⁶⁸⁾実習前に、ある程度、イメージできるような工夫をしております。 もう一つは、実習指導のあり方が、例えば⁽²⁷⁾守秘義務の問題等ですと、私どもと学生の感覚の違いというのが最近、非常に大きくなってきているので、2年前からですが、学生のSAを実習に関しては6人ほど付けて、どのような内容について、どういうふうに伝えていくことが学生にとって分かりやすいかということと⁽²⁸⁾学生の視点からも意見を言ってもらって、<u>実習経験者である学生のSAと教員とで、項目によっては一緒に内容を検討して、後日、反映させていくというようなことを行っております。</u>
オリエンテーション	施①：事前指導ということで、オリエンテーションは必ず実施しております。その中で、⁽⁶⁵⁾施設の概要ですとか、そういうところを知らせていく中で、やはり⁽⁷³⁾具体的に伝えていくということを大切にしています。具体的に申しますと、もう⁽⁷³⁾実際の場面でのエピソードを踏まえながら、学生に知っていただき、感じていただけたらというふうに思っているんですけども、やはり事前指導をさせていただいた後、実際に実習に来られたときにお忘れになっている学生も多いのかなというふうにも感じる部分もありますので、その点に関しては、実習に来られてからも繰り返し施設のほうでもお伝えするようにはしています。 やはり⁽⁸¹⁾施設の中に足を踏み入れたことがない学生も多くいらっしゃると思いますので、オリエンテーションのときは、硬い雰囲気にならずに、「こういった施設は初めてかな」というような話もしながら、⁽⁸¹⁾どんなイメージがあるかというような学生の思いも聞きながら、オリエンテーションの実施という
っていつて、現場の先生に見てもらおうということをやっています。そこでまた⁽³⁾具体的にオリエンテーションの話を聞いて、目標を作り変えて、それですまた日誌に書き、臨むようになっていく。 施①：実習生担当から何からやってきた。今みたいなお話が進んでいるのだったから、とてもいいことだと思う。⁽³⁶⁾先生たちが現場に来ていただきたい。⁽³⁷⁾事前に、どういう施設で、どういうことを、日常的にはどういう支援をするのかというところで、皆さんが実習に来たら、こういうことを」という話をして、その前に、知的障害児者の、うちは一番古いので、歴史と、どういう成り立ちで来たのかとかいうのは、もう本当に百何十年の歴史を30分ぐらいでしゃべり、それで実際に今、こういうことをしているということを話す。 施②：事前指導のときに、社会常識のところと、やっぱり学生もだいぶ変わってきていて、幾つか、僕もどこかで話したことがあるんですけども、学生のノートの手書き方というところで、⁽³⁴⁾基本的な常識のところとか、あと、多分、⁽³⁴⁾履歴書とかも書いたことがない学生がいたのか、以前、名前の印鑑を下の名前で押す学生がいて、すごくびっくりした。 本名の常識というところで分かっていない方というのが多いのか、⁽³⁸⁾ノートの書き方一つでも、「(笑)」とか書いてあったり、多分、どこの大学でも指導されているとは思いますが、⁽³⁸⁾とか書いてあることじゃないと思うんですけども、結構分かっていない学生もいて、僕としては、外に出ていく常識というところで、知識としてももちろん大切だと思うんですけども、そういう⁽³⁹⁾社会常識というところのレベルが下がっているのかなと思うので、学生と担当の先生方が接していく中で、足りないと思われていることを伝えていただければ。	養①：今年度から、児童養護施設に限って、⁽⁶⁴⁾事前オリエンテーションを県内の児童養護施設合同でやるという試みをした。各施設ごとの⁽⁴⁰⁾約束事、ルール、⁽³⁹⁾歴史的なこと、「そもそも、児童養護施設って、どうなんだ」という話は、あらためて現場の先生からお話を頂いて、「⁽⁴²⁾日々の生活がこういう感じだから、こういうことを勉強してきてね」とかというところを、学校と施設と両方から話をするというようなところで、⁽⁴⁰⁾言葉遣いもしかり、⁽⁴⁰⁾生活態度もしかり、なかなか保育の学生たちというのは、保育所保育士や幼稚園教諭を目指してやっぱ来ているので、施設というか、⁽⁵⁸⁾施設実習や施設に対するイメージがあまりない。その中で、やっぱり⁽⁵⁹⁾イメージをどう作っているか、で、なかなか学ぶというところが難しいので、とにかく、体験をして、そこから考える。先ほど、「学校で学んでいることと現場の」という話を頂きましただけけれども、学校でしか学べないことと、やっぱり現場でしか学べないことがあって、⁽⁵⁴⁾現場で学んできたことを学校に戻ってきて考えるのが実習の

	のは取り組むようにしていますし、⁽⁶⁸⁾施設内も必ず案内して、⁽⁶⁹⁾どういった場所があるかとか、⁽⁷⁰⁾実際の雰囲気を見ていただくようにしています。今お聞きしていて、とても十分に組み込んでくださっているのかなというふうに思います。やはり養成校のほうで感じていらっしゃる、養②の先生がおっしゃった、⁽⁷¹⁾今の学生と指導教員の方々とイメージされていることの違ひを感じておられる部分というのは、施設職員のほうでも感じることはありますので、共通認識の下、学生への指導はしていただいているのかなというふうに思いました。 施②：某自治体では児童養護施設、乳児院等、数が多いんです。それで、某自治体の〇〇協議会が施設福祉部として、児童施設部会、高齢介護の部会とか、長らく活動をしています。特に養成校と施設は、もう多分、今年で38年になります。保育士養成校と児童福祉施設の実習研究懇談会が、大体6月から7月かに毎年、交流の場を設けて積み上げてきました。その中で、最近はお互いにガイドブックを委員会として作っている。今、最終局面になっている、これも、うちの施設としても、また生かそうかと。現在は、自分のそういう施設で、「しおり」でしています。 それと、学校に対しては、もう、そんな望むというのは、これまでも散々そういうやりとりをしてきたから、今さらはないですけども。ただ、就職フェア等とかも、本当に最近では、もう、やっぱり僕らも⁽⁷²⁾タブレット等とかで、1日の様子、1年の様子等とかを視覚構造化して見せていくということが必要になってきているので、意識はしています。 それと、やっぱり社会的養護施設なので、実習の指導の事前のポイントは⁽⁷³⁾家族と離れて暮らさざるを得ない子どもたちの体感で、その施設という感じで来てもらって、⁽⁷⁴⁾一人一人の子どもの心象、心の象というか、そこで児童福祉を考えてもらう。 ひいては、それがやっぱり我が国の施策として、座学での学びと合わせて上げていってほしいと。それで、社会的養護施設なので、やっぱり、まず導入部としては、それぞれの⁽⁷⁵⁾子どもたちの成育歴のこととかを含めて、<u>実習生自身が自分の生い立ちと相対化して感じてほしいという部分</u>。 あと、私たちは障害児入所施設なのでやはり知的障害、医学的には精神発達遅滞、自閉症発達障害がいて、ああいった⁽⁷⁶⁾障害の部分の説明というのものも施設独自のマニュアルじゃないですけども、こういうものの、いかに触れる部分を、勉強もされているでしょうけれども、より深められるかというのも意識しています。 それと、やっぱり⁽⁷⁷⁾思春期を生きる集団であること、それから実習の期間の中では、⁽⁷⁸⁾ケースワークという部分については、もう入り口の部分しか無理なのかもしれないけれども、⁽⁷⁹⁾できるだけ包括的に分かってほしいと考えて接しています。
機会だからということを中心に話をしています。 オリエンテーションのときには、⁽⁸⁰⁾「これとこれとこれとこれとこれは必ず聞いてくるように」と、それを報告するという形で、学び以前のところとそとの不具合が生じないように、きめ細やかに指導していかなきやと思っっています。 マニキュア化をするのは簡単ですけれども、本当に考えなくなってしまうので、⁽⁸¹⁾最低限というふうには標準化をするか、<u>ここまではみんなが同じように情報を持ってオリエンテーションに同って、それぞれがそれぞれ違う所</u>で、⁽⁸²⁾自分がどういうふうにそこで実習を展開していくのか、<u>学んでいくのかというところを考える</u>というふうには心掛けてはおります。 養②：最近の学生は実習に行く前に、⁽⁸³⁾とても不安感の強い学生が多い。例えば、障害のある人に実習まで全く接したことのない学生なんというのも結構いますし、あとは、乳児院とか児童養護施設に関しては、やはり虐待の問題が社会的にもクローズアップされていますので、⁽⁸⁴⁾とても暗い場所じゃないのかとか、<u>偏ったイメージを持っていたりします</u>。⁽⁸⁵⁾全く知らないところと身を置くということに対する不安感も強く、今どきの学生というのは、結構評価の視線にさらされているところがあるって、⁽⁸⁶⁾ほかの人の目の線がとても気になる。評価されるんじゃないか、期待どおり動けないんじゃないかという、そういう不安を抱えています。⁽⁸⁷⁾オリエンテーションというのはとても貴重な場で、やはり今までよく分らない場所に行くという、<u>その分らないことがいろいろ確認できる場</u>ということになる。 オリエンテーションがどういう場なのかをしつかりと説明しています。オリエンテーションは、施設についてのさまざまな⁽⁸⁸⁾理念とか働きなどが説明されたり、⁽⁸⁹⁾保育士の職務が説明されたり、それを⁽⁹⁰⁾実際に見学できると、さらには、実習に臨むに当たって、さまざまな実習生としての態度とか、そういったことをしつかりと確認できる場だから、それを⁽⁹¹⁾しつかりと確認して、<u>積極的に不安を解消して、不安だけで心配になっていた部分を少しちゃんと理解してきて、実習に臨むように</u>ということの指導はしています。「オリエンテーションがこういう場だから、こういったことをしつかり確認してくるように」なんというのを、その目的と確認すべき事柄を、こういう手引きなんかを配っていますので、こういう⁽⁹²⁾手引きを通して説明をしている。2年ぐらい前までは、幼稚園と保育所、保育実習は別々だったんですが、共通している面が結構ありますので、これを合わせたものを作っています。 施①：知的障害とか、障害を持っている子どもと相対するのが初めての人ははいっぱいいる。かと思えば、特別支援学級が自分の学校にあったとする。⁽⁹³⁾見学もやりますし、⁽⁹⁴⁾こういう仕事をしているのかもやるんですけども、オリエンテーションの時間もそんなに潤沢にあるわけではないですから、何し	

	施①：オリエンテーションの実施も、できるだけ<u>施③各大学の方のみで行う</u>ようにさせていたと思います。やはり人数が増えますと、<u>施②学生自身がおどろ</u><u>いた考えをお持ちである</u>かと、<u>どういったお気持ちを抱いていらっしゃる</u>かというところが、少し把握し切れないところがあるかと思いますが、多くても4名までというところでオリエンテーションの機会を設けるように気を付けています。 施②：人数的には確かに、4までといったことはないですけれども、3人くらいまでと。 以前は、それも講義実習でしたけれども、某自治体では公共交通機関も発達している、今は通勤をベースとしているので、その間の中で、やっぱり<u>施⑦夜間に。昼間は騒がしい子どもたちも、眠っている中の匂いで感じることもある</u>ので、もう、これは保育実習との違いだと思わなければなりません。やっぱりそういう点のところで、<u>施⑦当たり前前、こうやって日常生活動作、衣食住みたいなもの</u>を。学生は、もう便利な時代で当たり前に思っているんだけれども、ものすごく、その間、こうやって、ちゃんと食事を取る、睡眠を取るといったこととかで、実習生にとっても刺激が大きいと思うので、やっぱり<u>施⑦その大切さ</u>みたいなものはオリエンテーションの機会では取れるようにしています。 養①：やはり授業の中では、一般的なことが中心になりがちです。できるだけ具体的に説明をさせていたところだと思いますが、短大の2年間で、うちの現状を言わせていただきますと、1年の終わりで実習に行かせていただいている中では、細かいところまで<u>施⑥自分の中で積み上げる</u>ことが難しいのが正直な印象として思っています。ですので、施設の先生方に、より事前訪問で具体性を持って、今言っていた大ききようにしていただけると、<u>施④「あ、この施設はこうなんだ」というふうに深められるかな</u>というふうに思っています。実際の実習の大体、ひと月前から2週間前くらいまでには行くようにして、そちらに行かせていただいて、再度、<u>施⑥学内に帰ってきて、もう一度、それを振り返り直して、もう2週間</u>で実習に臨んでいくということが理想ではありますが、やはり<u>施⑦うま</u>く深まらず、<u>実習に行かせていただいて、実習先のほうでさまざまに指導をしていただいて勉強を深める</u>ということが3割から4割くらいなのかなというふうなのが実感であります。 養②：実は私どものところは、<u>施②</u>できる限り自分の希望先というところで考えてはいるんですけれども、どうしても保育希望の学生ですと、<u>施③児童養護施設に随分、偏ってしまう</u>ことがあって。ですけれども、<u>施③</u>数としては障害系の施設が多いという中で、<u>施③</u>自分がそもそも希望はしていなかった施設に配属が決まる学生も多いんです。ただ、早めにもう、そこを切り上げて。私	ろ、<u>施⑥</u>うちの施設がこの地にあって、どういうことを営んできたのかということ、実際に、それこそ、「<u>施⑥</u>こういう子たちがいるんですよ」ということですよね。 <u>施⑦</u>課題を持ってきて、「こういうことをやりたいんです」と実習生の方がおっしゃらないですか。それはそれで、とても尊重させていただいて、ただ、「10日や14日で、それは」と思う。それは思うんですけども、それはそれでいいんです。その気持ちで来ているわけだから。だから、最終的には、まず<u>施⑥障害児</u>を知らなかった人知ってもらおう。それで、<u>施⑦</u>同じ時代に、君たちとあまやう年が変わらない人たちがこういいうところを生活していると。どうしてこういう生活をしないといけないのかというところを分かってもらおうといていいんですよ。だから、2週間やって、そのまいうちで1人の勤務ができるといったら、絶対できるわけではないわけではないから、僕らとしては、そこまで大きなことを実は求めていないんです。 男性だったら、男性職員が、担当が付く。だから、その間は、その人の休みのほかは、サブをやらんですけれども、その人と同じ早番、遅番、日勤とかをやる。同じ人に付いて。 知的障害児施設で働きたいという人は少ない。だけど、「<u>施⑦</u>こんな面白い仕事はないんだぞ」と教えることぐらいで、職員にはそれぐらい、その後、例えば、ボランティアに来てもらおうとか、そういうことをしてもらったほうが、よっぽどその人のためになるし、うちのためにもなる。知ってもらおう。だから、オリエンテーションでは、もうそこです。こつから課題がどうのこうのは言わない。 施②：<u>施④</u>毎年5月に、その年に受ける学生（24名ほど）の方たちに来てもらいます。<u>施⑦</u>事前レポートを提出していただき、1日かけて（10時から5時）講義を受けてもらいます。理事長のほうから<u>施⑦施設の概要、事務職員から補助金とかそういう措置費について、お昼を挟んだ後に、ケアワーカーの主任から子どもたちの生活についてと関わり方、ケースワーカーのほうから、今、養護施設、家族再統合と、親支援の概要、食育もすごく大切にしますので、調理師、栄養士による講座、途中で施⑥見学が入って、最後にわれわれ実習担当のほうから、実習に関する諸注意、質疑応答という形で、約1日かけて行っています。あくまでも広く浅くということなんですから、実習するに当たっての基礎知識というところで講座を行っています。</u>
--	--	--

	どもですと、配属が決まるのが5月の頭で、10月が実習ですので、大体、1カ月前の9月ごろにオリエンテーションにお伺いするんですが、そのオリエンテーションでのお話やレクチャーを通して、<u>(46)自分の実習に向けての課題を、漠然としていたものを明確にしてい</u>くことができるというふうを考えておりました。 一時期は、少しオリエンテーションのところでも、単に、どうしても遠方だったりすることもある中で、お話を伺って、必要なものであったりとか準備の具体的などところを確認するだけで終わってしまいがちだったんですけども、一度、体験をお願いしたことがありまして、お掃除をさせていただいたことが、何か2時間くらい現場に話していただくというようなことをお願いしたことがありました。それ自体はよかったんですが、なかなかコミュニケーションが難しく、挫折してしまったところがあります。 先ほど養①の先生のほうからお話がありましたけれども、少し実習に向けて、<u>(46)その施設で何が学べるのかということを学生がしっかりとイメージ</u>できるように中身というところを相談して、これから、もう少しやっていくたらいいかなど。かなり具体的なお話を伺えたというところなので、こちらのほうでも、こういったことをお願いしているかということをやっと考えていきたいとは思いました。
実習期間中の経験内容	施②：さっきの<u>(120)夜勤、夜間に身を置く</u>というのも一つのポイントとしてうたうと。それと、例えば<u>(125)入所理由</u>は、その施設が事業報告のときに要約してまとめたやつを説明する方法もあるんですけども、やっぱり要約しているから2次情報になっちゃうんで、夜勤実習のときに児童相談所からの相談受付等、<u>(120)生の1次情報に触れると、何か揺さぶるものがある</u>ようです。<u>(120)今、目の前にある子どもが、こういう道</u>のりというのは、やっぱりかなり<u>壮絶な子どもたちが多い</u>ので。 それと、さっきの日常生活動作のことも言った上で、やっぱり<u>(127)食事、それから着脱衣、入浴、睡眠、排せつ。やっぱりケアを受ける側は、排せつというデリケートな行為を他人に委ねるのは、心の痛み</u>とか。 重い障害の人は、知的能力を含めて、衛生的であることの理解が難しいということも。やっぱりこういったことは、<u>(130)すぐには変わらないかもしれないけれども、体験、体感してほしい</u>のと。 あとは、直接的な権利擁護というよりも、<u>(123)間接的な権利擁護</u>として、<u>やっぱり清掃とか、その空間を奇麗にすること</u>。サービス業のアルバイトをしている学生とかは、比較的そういうものの感度のいい人もいますけれども、やっぱりこういう点も、当たり前のことなんですけれども、意識して、してもらうようにと思っています。 施①：乳児院のほうでも、夜間の部分を知っていただくというところでは、<u>(120)夜勤実習を必ず1回は入っていただく</u>ようにしています。その中で、や
	施②：<u>(143)カリキュラム表</u>を作っていて、われわれの職員の仕事というのが、実際、どういう仕事をしているのかという業務への仕分けをした後に、その業務の仕分けを、本当に広く浅くなんですけれども、社会福祉士への実習ですと24日間、保育士の実習ですと11日か、12日になるんですけども、その中で広く浅くできる内容というのを整理し、1日目だったら、1日の流れを知るとか<u>(143)小題目、チェック項目を付けて、カリキュラムを作って、(144)全体的にケアワーカーの仕事</u>を体験できるように実習を提供している。 <u>(119)職員としてやるべき内容を全体的に経験</u>をしてもらう。子どもたちとの関わりは当然ありますし、子どもたちの関わりだけではなくて、家事全般も行いますので、「当園の仕事とは何か」というところを経験してもらっている。 カリキュラムを作ることによって、何となく1日の流れ、何となくこうするのではなくて、<u>(145)その日のポイント</u>、例えば、子どもの、今日は受容とか傾聴にポイントを置くとか、年齢幅がいろいろな子どもたちがいる中で、今、自立に向けて取り組んでいる、自立に向けての子どもたちを中心にみるとか、日によって、カリキュラムによって、何をすべきか。いつも学生も計画は立ててくれるんですけども、<u>(145)何となくではなくて、日々、何をするかというのを決めてやっている</u>というところは工夫している。7年ぐらい前からやっている。 以前は、学生に渡すのが何日は何時から何時というだけだったものを、そこに、その日の内容が書かれています。その日にできなかったら、<u>(146)積み残し課題</u>という形になりますので、私たちも実習に教えていくに当たって、「ああ、

	はり限られた人数で⁽¹²¹⁾子どもたちの安全・安心を守っていく責任の部分であるとかも体感していただくことによって、終わってから「夜勤で、こういうことを感じた」という発言をされる学生も多いかなというふうに思います。 乳児院のほうで、私どもの施設のほうでは、必ず⁽¹²²⁾新生児から 1 歳までのベビーの部屋に実習に入っていたりするようにしていますし、 そもその実習生を受け入れるときには、10 日間の決められた期間の中で⁽¹³⁵⁾他校の方であるとか他校のグループが重ならないように受け入れているので、1 期間に必ず 2 名まで、小規模ユニットケアをしていますので、ホーム編成として 6 ホームあるんですけども、その実習に入っていたただけの部屋も重ならないようにしています。なので、⁽¹³⁶⁾1 部屋に 1 人の実習生というところまで、丁寧な指導ができるようにというのは心掛けていますし、⁽¹⁴¹⁾反省会というのも毎日、設けるようにしています。 あと、⁽¹³⁷⁾実習担当者として 2 名、乳児院のほうでは配置されているんですけども、日々の指導というのは、⁽¹³⁸⁾その部屋の職員一人一人に担当していつてもらっています。⁽¹¹⁸⁾毎日、交代勤務の中で担当を割り振っているんですけど、⁽¹⁴²⁾さまざまな職員からいるんならアドバイスができるということころは、一つ、大切なことかなというふうに思っています。乳児院でしかできない実習というところ、乳児院を含めた社会的養護の施設というところ、やっぱり⁽¹²⁸⁾利用者、子どもたち一人一人を理解して、⁽¹²⁹⁾なぜこういう行動を子どもたちが取ったのか、⁽¹³²⁾この行動に対して実習生自身はどういうことをお考えになるかということころも実習生から教えていたきたいと思いが、経験を積んでいただけたようにしています。が、⁽¹⁶⁰⁾赤ちゃんと関わりのというのは、実習生自身、すごく悩まれる方も多いですので、その部分で、こういった指導が効果的なのかというふうなことは悩むこともありま	まだこのことを教えていなかったよね」とか、「このことを伝えていなかったよ」とか、学生もそれを見ながら、「ああ、まだこれは、この件については聞いていないです」とか、「この点をもっと詳しく聞かせてください」とか、紙に書かれていますので、箇条書きになっているので、それを見ながら、⁽¹⁴⁶⁾お互いに学生の到達度というのを確認しながら取り組めるので、担当者が複数いますので、1 対 1 ではなくて、実習担当とは別で、ホームの担当者が中心にラッスにはなっている。 問題は、学生によつては、そのカリキュラム、例えば、傾聴とか、⁽¹⁴⁷⁾基本的なことも理解していない学生が来たときに、せっかく作ったカリキュラムの意味があまりなくなってしまうことはたまに、そのレベルじゃない学生がい
	らっしゃって、「ああ、ここまで来ていないか」という。	施①：実習担当は、その部署、うちは児童の 15 人ずつの棟が 2 つあって、そのトップがいる。それが実習の担当で、その下に課長がいて、それが実際の現場のところである。 これを覚えてほしいということというのは、カリキュラムみたいなものを作っていない。最初にそちらからの課題と、こちらとしては、これぐらいをやってほしいという話はする。その後は、その実習生に付く⁽¹⁵⁸⁾実習担当の職員と一緒に仕事をしてもらう。 経験してほしいのは、特に今、知的障害児施設、障害児施設は、大きく分けて 3 つぐらい。本場に昔ながらの⁽¹²⁵⁾「障害の程度が重くて」というのと、ひとり親と、あとは虐待です。そういう子どもたちが⁽¹⁵⁶⁾どうしてこういう所で生活しなきゃいけないのか、そこで生活しているということを見て、一緒に経験してほしい。 そこで、「ああ、この仕事もいいな」と思ってくれた方は、それなりに自分で課題も見えてくるでしょうし、その後、自分がどういう仕事に就こうかなと思ったときに、うちもその選択肢の一つにしてももらえる。ただ、「本当は来たくなかった」というのが見える人もいる。それでも来て、十何日、うちで実習するのは、最初、嫌々だったかもしれないけれども、どこか、いいところというのが、「こういうこともあるんだな」ということを知ってもらえればいい。短大生だと、本場に 20 歳ですよね。自分が 20 歳のことを思ったら、そこまですと実は思う。20 歳でうちの仕事に就く人は、そういう人。去年、福祉系の高校を出てすぐ来てくれたとでも今伸びている方。 世の中、福祉というのはいろいろある。特に障害者福祉はマイノリティーなので、そこに実習に来てくれて、そこで⁽¹²⁸⁾「こういう子たちがいるんだよ」と知ってもらったところが第一歩だと思っています。そんなにカチッとしたことではない。 担当者の仕事を一緒にやっていく方法。僕が本当に現場にいたところに、実習担当が苦手というか、やっぱあまりそういうのは合わない職員がいる。僕み

	いました。やっぱりここは大事なことで、何とかが学んでほしいポイントだとは思っています。 養①：当県でも、本当に施設の先生方は、ユニットには1人しか実習生がいけないようにであつたりとか、また養成校とは変わらない、それはこちら側でも配慮させていただいています。そういうふうな形で、<u>養①の先生に言うていただいたように、⁽¹⁰⁵⁾細かくご指導をさせていただいて、こまめにケアをしていただいています。</u> その中で、例えば実習生たちも学びが深まりますし、疑問に思っていることを職員の方に言えるし、そこに、言えなくても、例えば⁽¹⁰⁶⁾施設の職員の方が<u>気が付いてくださって、「大丈夫？」と言ってくださいから言えるという学</u>生もおられますし、本当にそういう形で⁽¹⁰⁶⁾配慮をしてくださっていることをあらためて感じられましたので、そういうふうにしていただけたら本当にありがたいというふうに思っております。
	たいに、やたらしやべってしまう人とか、すぐ仲良くなれそうな職員を実習担当にするんです。大体、そういうのは、自分の所でも仕事がある程度できるんで、それは副課長とか主任とかになっていく連中なんですから、こうなつてくると、彼らは、実習生が来て、何を教えたらいいいのかわからないのは、もうずっと代々受け継がれていることとかいうか。継続的な関わりを持てる。 みんな、不安で来るんです。これは、僕は児童施設の現場を20年やっていんだですけども、うちに入ってくる子どもたちは、先生のところもそうだと思うんですけども、子どもたちというのは、早い子で言ったら、乳児院からいうんでは来ちゃったりするんです。で、それというのは、⁽¹⁰⁸⁾児童福祉施設というんでは、<u>全て自分が手を挙げて、「入れてください」と言った人は一人もいないんですよ。気が付いたら、連れてこられて、例えば、小学校1年で親御さんが離婚などをされて、うちに来るじゃないですか。不安で不安でしようがない。泣いている。</u>まず僕が面倒を見ます。僕が面倒を見て、ご飯を食わせてあげて、トイレに連れて行ってあげて、お風呂へ一緒に入ってあげて、寝かして。でも、次の朝、早番は違う人が来るんですよ。かかる子はもったかか。それに慣れるまで、2〜3カ月、やつぱりかかりますよ。かかる子はもったかか。僕の実習生にしても、そうだと思うんですよ。「ひとまずは⁽¹³⁹⁾僕が担当だから、僕と一緒に仕事をして、ひとまず、僕の言うとおりにやらない」というのが一番大事。その継続性、継続性の中で、安心感も含めて。学びもやっぱり深まっていく。あとは、副担当は一応決めて、その職員がいないときは引き継ぐ。 養②：施設実習Ⅰが入所型施設を経験すると。選択の保育実習のⅢについては、通所型の児童福祉施設を選択するという形式を取っていますので、こちらを選択する学生が年によってかなり人数的な幅があります。30名ぐらい、20名ぐらいのときもあれば、10名ぐらいのときもある ⁽¹⁰⁸⁾不安を抱えて出ていくんですけども、幼稚園と保育所と施設、3つ比べた場合に、帰ってきて、⁽¹⁰⁹⁾一番楽しかったと言う学生は、<u>うちの場合には、施設が圧倒的に多かった。</u>それで、それがなぜかというと、幼稚園が一番怖かったということです。 施設の場合、いろいろ保育士が、それはさまざまな生活を通して子どもに支援しているわけですけども、例えば、それも初めてやることも多いわけなんです。例えば、おむつ交換をしたりしたときに、⁽¹⁰⁷⁾施設の先生方というのは、<u>きつと励ましたり、受け止めたりしてくれん</u>んですよ。「あなた、初めての割にちゃんどできたじゃない」みたいな、そういう一言がとても不安を解消して、「あ、自分ができるんだな」という、そういう意識を持つことにつながっている。もう一つは、⁽¹¹⁰⁾指導案とか、<u>そういう責任実習みたいなものがないというのが、若干、プレッシャーを低めるのに役立っている</u>のかなというのをちょっと感じています。 養①：まさに今、ⅠとⅢのその区別をどうするかということ、先ほど申し

	上げたワーキンググループのほうでやっているんですけれども、やはりⅢを選択してくる学生というのは、⁽¹¹⁴⁾<u>就職</u>ということを少し念頭に置いているので、児童養護施設の場合だけではないんですが、⁽¹¹⁵⁾<u>個別支援計画</u>とか、<u>児童自立支援計画</u>というところについて、少し触れる機会があるといい。⁽¹¹⁶⁾<u>フアミリーソーシャルワーカーの話</u>を聞く機会があったりとかというところで、⁽¹¹⁷⁾<u>生活、施設の職務全般をというところをベースに、その上に乗っかってくるところをどういうふうに体験させていた</u>だけなのかというふうには思っている。 本当に施設が楽しかったと言っ帰ってくる。それは障害の施設であっても、そうでなくても、結局、⁽¹¹⁸⁾<u>初めての体験の場所</u>で、<u>不安も大きいんですけれども、行ってみて、初めてのことがこんなに刺激的だ</u>というか。で、やはり 3 を選択する学生は、そのまま就職につながっていきそうです。特に何かということ要望するのであれば、就職ということを見据えたときに、もう少し深いところまで話を頂けるといいのかなというふうには思っています。ただ、実際、そこまでするところは、正直、短大では難しいかなというのもありつつ、その辺がちょっとジレンマかなと思っております。 養②：入所型施設実習、通所型施設実習は、施設の種類によって利用している子どもたちの背景も違ってくる。保育所実習なんかだと、子どもの発達過程みたいなものが、子ども理解のポイントになってくるかと思うんですけども、施設実習の場合には、⁽⁹⁰⁾<u>子どもたちが自分の責任でも何でもなく、どういう状況を生きてきて、その結果として、どういうことを経験して、今、施設で暮らしているのか、そしてその⁽⁹¹⁾施設で暮らすということの結果として、今、どういうことを、例えば、<u>将来的な不安、家族の不安を抱えているのか</u>みたいなところは、きっと、施設の種類の違ったとしても、ある程度共通していることじゃないかというふうなことは学生には伝えていて、そういうことが施設実習に行くときの利用者の理解になっていくんじゃないかということは伝えていきます。</u> 乳児院とか児童養護施設で実習をする学生、あるいは、障害者施設のほうでも共通していると思いますけれども、⁽⁹²⁾<u>どうしてここで暮らしているんだろ</u>う」というところに疑問とか関心を持つことはあります。ただ、それは、子どものプライバシーに関わることなので、「興味本位では、そんなことは、例えば、先生にお願いはできないよね」ということは伝えていきます。もし聞けるとしたら、子どもと関わっていて、子どもがこういう行動をして、あるいは、こういう言動をしてくと。それは、それで自分はその子どもとの関わりにとっても困ってしまっ、手掛かりが見つからないと。そういうことをきっかけにして、「では、⁽⁹³⁾<u>何でこの子はこういうふうな言動をするんですか?</u>」というふうにもし質問したとしたら、その背景を、もししたら、伝えてくれるかもしれない。「そんな感じで質問してみると、どうですか?」なんていうことで、⁽⁹³⁾<u>少し理解をしていくための取っ掛かり</u>みたいなことで、後で伝えたりする
--	--

	ことはあります。 ポイントとしては、どうしても施設について、新しい、知らないことが多いので、客観的に施設を理解しようとしてずっとやってくるんですね。ただ、もう一つ大切にしているのは、やっぱり⁽¹⁰⁴⁾自己理解ということを大切にしていますので、さっきのエピソード記録の話にも関わってくるんですけども、「いろいろ理解したけれども、保育士を目指す⁽¹⁰⁴⁾あなた自身はどんなことを経験したり、どんなことを感じてきたのかと、<u>そういったことをもう少し、自分と向き合ってください</u>」ということを言うようにしています。 障害のある方と出会って、⁽⁹⁴⁾どんな工夫をして、<u>どんなことを感じたのか</u>、障害のある方はなかなか言葉でコミュニケーションできないんだけど、⁽⁹⁵⁾どういふところを見て、<u>どんなことを伝えようとしていふふうに判断したのか</u>、⁽⁹⁶⁾関わってみてどうだったのか、⁽⁹⁷⁾それを自分がどうだったのかということをやちゃんと理解して、それをエピソードで書けばいいんじゃないかなんていうことをちゃんと伝えるようにしています。 養①：一つは、記録のところ、保育所、幼稚園はやっぱり時系列でいうところが主流になっていますし、いろいろなパターンがあると思うんですけども、施設は、できれば、⁽¹⁰²⁾エピソード記録で記述をすることを、取り組んでいる。やはり⁽⁹⁸⁾考察をするときに、<u>彼女たちの「何でだろう」という本当に単純な疑問というのは、実はすごく大事で、でも、素直なんですかね。勉強していないと思われたらどうしようと思って、聞かないんだと思うんですね。でも、「本当にその『何でだろう』が大事だよ」ということを伝えて、⁽⁹⁹⁾自分はどういう場面でこういうふうに関わって、<u>こういう反応があって、でも、本当にそれでよかったかどうか</u>も分からないから、⁽¹⁰⁰⁾どうすればいいかという、⁽¹⁰¹⁾自分がどうして、<u>どう考えたか</u>というのを合わせて伝える、それが質問するということだと思ひ、⁽¹⁰³⁾言われたことを言われたままやるのではなくて、<u>やっぱり考えてやる</u>ということをどうやって伝えるか。</u> もう一点は、生活ということをするごく大切に伝えたいと思っているので、⁽⁹⁷⁾生活の場だということをしをきちんと考えてくる。だから、保育所や幼稚園は毎日帰る家があるけれども、入所型の施設の子どもたちは⁽⁹⁷⁾そこが生活の場であって、その当たり前の生活をどう支援していくかということを見分けるに考えてくる。⁽⁹⁸⁾当たり前の生活というのは一人一人違って、本当に見るものの全てが学生にとっては初めての場なので、「では、⁽⁹⁸⁾生活とは何だろう」、答えは出ないと思いますけれども、そこについて考えてくれることが、子ども理解につながったり、「⁽⁹⁹⁾支援とは何だろう」というところにつながるかなというふうな自分では心掛けてやっています。 施②：社会福祉実習と保育実習を受けているんですけども、やっぱり保育士実習の方のほうが、時系列で最初、書かれていて、その中から⁽¹⁰¹⁾エピソードを取り上げて、<u>考察</u>というふうなところは、社会福祉士の学生よりも、まず最
--	---

		初の部分がすごく濃いなとは思っている。 <u>そのエピソードのときに、その⁽¹³²⁾考察という視点で、自分は本当にどうしてそう思ったのかという部分が、これは、多分、大学でも指導してくださっているとは思わんだけれども、最初、出来事だけが書かれている。その時系列とは違って、こういう行動をした。⁽¹³³⁾自分なりに行動を。その行動した理由とか、で、その後、子どもがどう反応したとか、そこが欲しいんですけど、徐々にできていくという。それでも、学生を⁽¹⁴⁰⁾一緒に育てていくという感覚で僕らも思っていますので、一緒にやらせてもらっているということ、そのノート自体の書き方とか、書式は、その辺りでは特に、本当にそれぞれの大学であるんだけれども、やっぱりその考察というのは、僕らでも難しいと思うので、一緒にやりながら、やっていければなとは思っているんだけれども。</u> 施①：時系列のやつは、どう使ってもらおうか、もういいと思う。⁽¹⁴⁸⁾職員が<u>気付かされるのは、その考察とかエピソードみたいところで</u>。「ああ、そうか。そういうふうにも思ったんだ」というのは、僕らでは気が付かないところがあるんです。だから、「そうか。学生が見たら、その場面はそう映ったのか」というのは、<u>逆に勉強になったりする</u>んですけれども。僕ら、結構年を取ってしまった心には。だから、何というんですかね。やはりそのときにそのことをどう思ったかという感想でもういいと僕は思ってしまうんです。その感想が、「ああ、こうやって思ったのか」、もし違っていたら、そこはこっちがそう思ったら、「実はこうこうだったんだよ」というのが言える。それがとても大事なのかという気はする。ポイント・ポイントで感想を書いてくれればいいかなとは思います。 やっぱり⁽¹⁵⁴⁾「こう思った」ということに対して、<u>こっちがリアクションすると、それは変わってくる</u>んです。だから、先生がさっきおっしゃったみたいに、アクションをしてくれると、リアクションはしやすい。特に、リアクションのほうは、こっちとしては、ちゃんと自分が思っていることを伝えやすいので。
子ども・利用者や施設理解のため	子ども・利用者や施設理解のため	施②：今、学校で勉強をされている。もし、こういう児童福祉施設に就職してからでも、それはもう既に学び取ったものの、自分の中に入っただけのものと単純化して思いがちなんですけれども、やっぱり本当を言うと、⁽¹⁷⁰⁾<u>いざ現場に入ってから、あのたくさんの教材をもう1回、開くと、かなり入りやすくなる</u>んです。なので、現在、勤めている人たちにも、それはよく言ったりするんだけれども。 要するに専門研修、専門的なことを勉強していくんだけれども、同時に、こういう施設福祉に来ると、専門研修も、やっぱり組織性。発達障害とか他も含めて⁽¹⁷²⁾<u>社会性</u>、⁽¹⁷³⁾<u>人間関係を築く力</u>とか、⁽¹⁷⁴⁾<u>社会規範を守る力</u>とか、そういう障害児者のみのハンディーというよりも、やっぱり、まだ

	若い人たち。どんなデクノロジーは便利になって、⁽¹⁷⁵⁾コミュニケーションのことは、やっぱり⁽¹⁷⁶⁾フェースツーフェースの対人相互性のことと、勉強をまだ学ばないといけないこと、口頭で話すと、記述にするのでは。やっぱり頭の中で、もう1回学ぶということがものすごく多いので、⁽¹⁶⁹⁾とにかく書く。これは書くエスプリとか。どんな人でも⁽¹⁶⁹⁾量をこなして初めて質に転じていくので、実習ノートというのは、拙くてもいいから、とにかく量を書かせていくのと。中に、やっぱり面白い視点の質問があったりした場合は、そのノートの様式にとらわれず、レポート用紙の下にセロテープで貼ってでも、下に伸びてでもいいから、⁽¹⁸¹⁾職員が反応を返すようにする。そうすると、実習生にとってはものすごく充実した期間になる。何人かに1人はそうやっていくんで、やっぱり頑張っ量を書くということも重要に思っています。 それと、実習に来た、このときのことだけじゃなしに。僕たちも中間反省会と、最後、全体反省会をしているんですけど、時にローテーション勤務で「ちよっと援助をこの部分だけ、してもらえませんか」と言っている場合とかには、やっぱり、あくまで今は学生で、実習をしているに過ぎないかもしれないけれども、⁽¹⁷⁶⁾働くということとか仕事観。この仕事は、⁽¹⁷⁷⁾やりがいがある、自分が前にも関わっていると思うとおられるんですけども、その中で、自分で見いだすものでもあるので、例えば⁽¹⁷⁸⁾今、勤めている人たちのエピソードであるとか、⁽¹⁷⁹⁾自分のキャリアも、おぼろげながら何かちよっと感じてほしい。⁽¹⁸⁰⁾20代の過ごし方、生き方みたいなものも、ちよっとイメージさせてあげようように対応はするようにには心掛けていますかね。 やっぱりその日の実習生と組んだ職員が、「ああ、この子は、もう最初から諦めているな」とかになると、もう厳しくしたところで、もうちよっと頑張れと。「このときはどう思ったんですか」とかいいます。やっぱりそれでも改まらなかったら、期間の真ん中の中間反省会で「⁽¹⁸²⁾もう、ここまでではこうやったらけれども、残り、ちよっと頑張ってみよう」と。 施①：⁽¹⁸²⁾子どもたちの姿の理解というところでは、学生もそれぞれに授業等で、⁽¹⁷⁷⁾座学で学んできてくださっているかとは思いますが、実際に実習に入れたときになかなか慣れにくい部分というの、やっぱり思っているしやるのになかなか慣れにくい部分というので、そういうところが感じた場合には、こういう⁽¹⁷⁷⁾授業の話とつながるようなアドバイスができるようにというのは気を付けていますし。実際、反省会で「こういう姿があるって」というふうに話してくださるときに、あえて「じゃあ、⁽¹⁸⁷⁾この場面で、実習生はどういうふうに感じたのか」というのを聞かせてもらいたいながら、子どもたちの理解につながるように⁽¹⁶⁸⁾支援方法を、また新たな道を見つめられるようにというふうには思っています。
--	--

	実習記録のほうでも、やはり⁽¹⁶³⁾一人一人の人の知ってもらう人間理解というところをテーマに実習記録の記入をオリエンテーションのときから促すようにはしているんですけども、実際、学生によっては得意不得意がありますので。本当に第三者として子どもの様子を観察したまま記入していらっしやる学生もいれば、そこにしっかり自分が主人公として、⁽¹⁶⁴⁾子どもたちとともに主人公として出てきて、エピソードを記入して、⁽¹⁶⁵⁾こういうふうに感じたという考察まで記入できる学生と、さまざまなかなというふうに思いますので、前者の第三者になりがちだという学生に関しては、より、こういうふうな書き方もあるということは、都度、お知らせするようにはしていますし。 養①：県は、手引きのほうは共通のものがあるとお伝えさせていただいたように、日誌も一応、共通のものがありまして、そちらを中心に。施設のほうにも、もちろん、こちらをお渡しさせていただいて、これで書かせていただくというお願いをさせていただいております。ただ、施設によっては独自のものを採用させていただいているところもあるので、そこはそれで書かせていただいています。 その中で、私が学生に伝える中でのポイントは、まずは具体的にすることと、うことをしていこうという話をしています。やっぱり学生は、楽しいとか、うれしいとか、ちょっと抽象的なところがありますので、何がどうなのかというところをもう少し細かく見ていくことで。配慮というところを書く項目があります、それが配慮につながっていくといいと思いますか、具体的にみていくことによって、⁽¹⁶⁶⁾自分が利用児者に対して、その行動のときに何をしていたのかというところが見えてくる。そういうところを、しっかりと行動を見ていこうというところを言っています。ですので、自分で行動をしているのに、その行動を文字に落とせない学生というのはたくさんいますので、「ちゃんとやっている、話の中では出てくるので、それを記録に書いていくんだよ。細かいかもしれないけれども、具体的にたくさん、しっかりと書いていくことで、指導の方にも見えていただいて、ちゃんと意見とかご指導をいただけるから」ということを伝えていきます。そして、これの内容というか、1日の振り返り等のところ、よく施設の職員の方に言われるのは、「日記ですね」というふうに言われます。結構、考察ができなくて、感想で終わってしまう。ですので、⁽¹⁶⁷⁾具体的な事例を書いて、⁽¹⁶⁸⁾それに対して背景要因が何なのかという⁽¹⁶⁹⁾自分の意見を書いて、⁽¹⁷⁰⁾そこに対してどういう行動を実際に自分がしたのかを書いて、⁽¹⁷¹⁾その結果、どうだったのかを書くということを学生に伝えてはいますし、じゃあ実際に書いてみようかということで、⁽¹⁷²⁾例えば DVD とかを見ながら、その一式とシチュエーションで書いてみて、⁽¹⁷³⁾私のほうで添削というのをさせていただきます。施②の先生に言っていたように、量を難しいのが現状ではあります。施②の中というところで、そういうふうにしてくださる施
--	--

	設であればいいんですが、もちろん全ての施設がそういうところではありま せんで、できるだけ授業の中では、通り一遍かもしれませんが、その辺り をお伝えして、学生には書けるようなベースをつくっているのが現状にはな っています。 養②：ほぼ養①の先生が言ってくくださったことと同じなんです。指導をす るときに、一つ、やはり⁽¹⁵⁸⁾記録をすることが現場の方たちにどんな 意味を持つのかということ、⁽¹⁵⁹⁾現場で求められる記録と、それから学生が実習期 間中に行う日誌との関係性というか、整合性を少し持たせるような形で日誌 のほうを工夫できないものだろうかということをいつも考えるんです。確か に非常に稚拙なものが多いんですが、例えば現場で、こういう形で記 録というのは使われるものなので、こういう観点で、こういうことがきちん とできなければいけないという。現場で求められる記録とか、書く力という ようなところを見せながら、⁽¹⁶¹⁾学生自身も記録に臨めるような何か教材と か、それから⁽¹⁶⁰⁾日誌の形態を工夫できないかということ、今、ずっと考 えているところです。 施②：現場のほうでの、普段の日常、デイリーの諸情報の日誌、あったこと の特記事項を書き連ねていくことと、実習日誌というのは、比較的、共通す る部分が多いと。 ただし、⁽¹⁶⁶⁾自分が何を思って、エビデンスで、どう行動したかというの も、やっぱり実習生の日誌には求められるからちょっと難しいんだろうな と、正直、思っています。 これらの訓練を経て、現場では、まずは日誌のそういった普段のルーティ ンの仕事を身につけていって、その上で、今度はより高次の専門性、個別支 援計画、自立支援計画というの、やっぱりこれも量をこなして質にという ので。やっぱり職員を人材育成する上でも、難しく書けると言うわけでも なくて、特に⁽¹⁶⁸⁾先輩職員が若い職員に褒めてあげてほしいのが、「何年前の 自分は、こまでのこれを書けなかったよな。書ける自分になったことを自 分で、ちょっと誇れ。喜べ」というので言うようにはしていますけれども。
訪問指導	養①：保育の養成校に移って、施設の巡回はもう福祉系の教員が行くというふ うにそこはして、そうしないと、⁽²⁰²⁾話が通じなかつたりとか、⁽²⁰¹⁾専門性が かなり違いますので、同じ人間がなるべく行くようにして、⁽¹⁹⁸⁾施設の方と顔 が通じ合うというような関係をつくるように心掛けていました。今の学校に 移っても、⁽¹⁹⁹⁾なるべく同じ地域に同じ先生が回る。それにプラスして、やは り出す前に、⁽¹⁹⁵⁾課題を抱えている学生が一定数おられますので、そこについ ては、実習指導 1 は 5 人で担当しているんですけれども、⁽¹⁹⁶⁾必ず担当が行つ て、巡回訪問だけではなくて、⁽¹⁹⁸⁾場合によっては事前に連絡を入れたり、途 中で連絡をしたり、もう一回連絡を入れたりとか、密な関係でというふうに

	に差が生じてしまうことともありまして、指導というよりも、実習期間中の⁽¹⁸⁸⁾<u>学生の状況把握</u>にとどまってしまうという現状があります。元気にやってくるとか。 この 10 日間のうちに一度、訪問させていただく訪問指導をどういうふうにしていったらよいのかというのが、実は非常に困っているところなので、アドバイスをいただければと思うところ。 養①：本学も同様な感じにはなっております。本学は 50 くらい施設の回ります。担当が 2 名です。同じように全てを回ることはできません。です。で、手引きまではいきませんが、⁽¹⁸⁹⁾「<u>このポイントの実習先の職員の方に聞いてきてほしい</u>」。⁽¹⁹⁰⁾「<u>学生たちにはこういうふうな指導をしてほしい</u>」。⁽¹⁹¹⁾「<u>その中で疑問があれば、実習担当者に連絡をするように</u>」というところにとどまっているのが現状にはなっています。実際のところを申し上げると、<u>施設の方から指導をいただいて、そちらをこちら側で踏まえさせて</u>いただいて、近々の指導には生かせないんですが、⁽¹⁹²⁾<u>次年度等に生かしている</u>こともありますし、本当に学生に元気でやっているかという⁽¹⁹³⁾<u>様子伺いで終わってしまっている</u>ところもあります。もう少し、せつかく行かせていただいて、<u>施設の職員と直接、お話ができる機会</u>ですので、⁽²⁰⁰⁾<u>有意義にできた</u>らとは私自身も考えておりますので、アドバイスをいただけたらと思います。 施①：各学校の状況というのはおありなのかというふうには思う中で、やはり学生の姿を見ていると、いつも顔を見知った先生方がいらして下さるというのは、一つ、⁽²¹⁷⁾<u>あと残り数日を頑張ろうという気持ちになれる</u>のかなというふうに思うところではあるんですけども。 やはり⁽²²⁵⁾<u>直接、指導をなさっている先生がいらっしやる</u>ことが、<u>より学生の実習がよいものになる時間</u>が生まれていくのかなと思いますので。当園のほうでも、いろんな学校から受け入れてはいるんですけども、結構、ゼミという形で先生がいらっしやることも多いです。「ゼミの担当をしています」という形でいらっしやることも多いです。本当に実習指導を直接的にされている先生がいらっしやることで、来られない場合でも、学生自身はその先生のことを知っていて、話したことがあるですとか。養①の先生や養②の先生がなさっているように、学生の、先生方ご自身が行けない場合には「こういうふうなことを聞いてきてほしい。こういう様子を見てほしい」というのは、やはり先生同士の連携を取っていらっしやるので、「ちょっと直接の担当者ではないんですけども、こういうふうな担当から聞いて訪問に来ては、この次第です」ということをお話しくださいしますので、「その点に関しては、こういうふうなことです」というので、学生の様子をお知らせしたりとか。 あと、「こういうふうな、もう少し頑張ってもらえたらなと思っています」
	は考えています。 本学は、180 人ぐらい学生がおりますので、実際は網羅することができず、後からぽつぽつと課題が上がってくる場合があります。なるべく⁽¹⁹²⁾<u>実習の中期盤</u>に巡回ができるようにしているんですけども、数が多いというところとあって、五月雨ではなく、一定の期間に全員が行く。1 教員が大体 12～13 カ所、約 5 日間の中で回るとは思いますが、その後、大々に行きたくときには特に問題なくやっていただけたらいいんですけども、そんなこともあって、若干、⁽¹⁹⁴⁾<u>巡回が形式的になりがち</u>で、きめ細やかな対応や指導は、やはり実習担当がしている。 ⁽¹⁹⁷⁾<u>巡回指導は、全教員がやる</u>。あとは、こちらでもアポを取って伺っているんですけども、特に施設の場合は、イレギュラーなことが起きて、ご担当の方にお話が伺えなかったりとか、今日伺っている先生のところは、担当が固定でということでお話を伺いましたけれども、日によって、やっぱり担当が違っていると、受け入れ担当の職員の方が、「私は実習生を見たいので」というふうに前置きをされて、「なので、様子はちょっと分かりません」と言われてしまうことがあって、ちよとそこのところ、あまり、こちらもお願いをしている手前、「何とかしてください」とも言えず、「ああ、そうですね」みたいな感じで、ちよとそこは、私たちからもアプローチしなきゃいけないところかなというところを感じています。本当に、でも、やっぱり関係性ができてきたという所については、受け入れてくださる施設側も、⁽¹⁹⁴⁾<u>今まで言えなかったことを言ってもらえるようになっている</u>ので、巡回も、関係をつくるという意味では、すごく大切な方法だなというふうには感じています。 養②：施設の訪問担当は、小学校担当の 3 名を除く⁽¹⁷⁰⁾<u>12～13 名で担当</u>している、そこで学生とどんなふうな話をしてくれるのか、<u>実習先の先生方とどんなふうな意見交換をしてくれるのか</u>、⁽²⁰³⁾<u>担当者</u>に任ざれてしまっていますので、<u>ちよともしかしたら、ばらつきがあるかもしれない</u>。⁽¹⁸⁷⁾<u>最低限、確認して</u>くることは、後で記録用紙というのの様式が決まっていますので、問題ありません。なかったのか、健康状態とか、いろいろそういう書き込む用紙がありますので、そういう部分で⁽¹⁸⁹⁾<u>標準化を図っている</u>。それで、なるべく⁽¹⁹²⁾<u>中間ぐらいに行くようにはしています</u>。それでそのときに、なるべく⁽¹⁸⁴⁾<u>学生の話はしつかりと聞いて</u>、⁽¹⁸⁵⁾<u>いろいろ引き出すようにはしています</u>。 施①：⁽²²⁰⁾<u>できれば、先生、自分の生徒が行く施設はどういうところか事前に</u>見に来ていただきたいというのの一つと。 ⁽²¹⁵⁾<u>毎年、来る学校が決まっている</u>んです。ということは、先生がおっしゃったように、毎年毎年、少しずつあればあるけれども、⁽²¹⁶⁾<u>大学は大学で引き継ぎをして、次の人に渡して</u>くるんです。となってくると、さっきみたいなことが起きづらい。⁽²¹⁶⁾<u>施設側も、もう分かっている</u>ので、向かいやすいですし、

とか、逆に⁽²⁰⁷⁾すごく頑張っていらっしやることもお伝えしながら、訪問指導のほうは対応をしていますので。やっぱり学生にとつての、⁽²⁰⁸⁾指導をくださっている先生が訪問に来ていただけたらいいかなというの、学生にとつてもすごく必要なのかなというふうには感じています。 施②：ちよつと、ここまでこうやって話していたら、うちの施設はオペレーションなどがめっちゃやさそうに思われてしまうから。決してそうでもなくて、過去に養成校の先生が来てくれたら、もう、やっぱり⁽²¹⁸⁾「ああ」と言っただけの子もいましたし。もう、そうすると、よく、ちよつと調べると、うちの⁽²⁰⁹⁾職員も指導というよりも姑みたいになっただけな、そんな重箱の隅突きみたいに言うのは修正しなければならぬこともあるし。 でも、やっぱり、まずは施設節というのを字義で、文字面で並んで、⁽¹⁸⁹⁾体感する中で、本当に最初は不安、恐怖、分らないからというの、ちよつとずつ「ああ、そうでもない」へ。知ることによって、そういうのは平気になっただけです。 ただ、勉強する上での知識、そこからの。援助技術みたいなものも知識として学ぶんやけれども、やっぱり実習生に関わらず、社会で一番、求められているのは⁽²⁰⁹⁾主体性。世の中で成功をしている人は賢い人だと思いがちだけれども、⁽²⁰⁴⁾よい態度とやる気を持続けた人なんです。決して賢い人じゃないんです。 やっぱりそういうこととかで、⁽²⁰⁸⁾頭でっかちになっちゃうって⁽²⁰⁹⁾自分で壁を築いたり、⁽²¹⁰⁾パフォーマンスが落ちがちなのは昔に比べて多い。⁽²¹¹⁾メンタル面で、こういうことをできると思ってたけれども、学生の間で対人技術は、⁽²¹¹⁾感情等のしんどさで、もしかしたら⁽²¹²⁾修正をかけたほうがいいような学生も、最近、ちよつとずつ見られるようになつてきているので、厳しいかもしれないけれども、先生が来られるタイミングという中で、やっぱり、⁽²¹²⁾ちよつと難しい問題があったときには、そのときに協議するようにしています。	きつと大学の先生たちも毎年毎年なのではないかと、同じ大学にするということは、学生は学生で、先輩、後輩になつてくれるんですよ。で、そういうところでは、もう新しい所は、実は、断っているんですね。児童で言ったら、たかだか30名規模で、2つの寮しかなく、毎月というわけにはいかないの、隔月ぐらいにさせてもらおう。⁽²¹⁵⁾絶対数がもう決まっているんですよ。 先生たちが来る（訪問）ときには、実習の人たちは、もう何日か、うちでやっているから、うちの中の話は先生以上に分かる。先生たちはやっぱり、学術的なところと、先ほど言った自分たちのカリキュラムの中のこととでしゃべる。そうすると、学生は「現場に来て、それを言われても」なんです。「確かにそれはそう。だけど、現場は現場でこうやって教わって、こうやって、今、やっている」ということを学生たちがしゃべります。本当だったら、僕らが大学のそういうところに行つてしゃべると同じように、⁽²²⁰⁾実習担当の先生は、半日でもいいから、現場で職員と一緒にやったらいい。 ⁽²²¹⁾こつちの感覚と先生たちの感覚がずれるところはあります。生徒さんたちは、先生たちから、この教科書とか、いろいろな話を聞いて、うちに来て、「でも、現場はこうなんだよ」というところも分かって。⁽²²³⁾学生たちは「楽しいことは、こんなことがあつて」というのを話したい。だから、そこを受け止めてくれる先生たちがもうちよつといれば、楽しい。 施②：実習担当が3人いまして、⁽²¹⁴⁾実習担当とその訪問担当の職員がいて、必ずその2名が学生と共に、先生を迎えて4名で巡回指導を受けるという形を取っています。 日程が合わないということはないと思つているんですけども、よく訪問指導で来られる先生が、学生の様子を聞かれたときに、「⁽²²²⁾私も何も知らない。今日、初めて会ふんです」という先生が一番、僕らも困るんですよ。それは本当に一番困るかなということと。 児童養護施設の実習でたまにあるんですけども、自分自身が虐待を受けた経験をお持ちの学生がいて、フラッシュバックしてしまう方がいたりしたときに、「⁽²²⁴⁾ちよつと課題のある学生が、ちよつとこういふので困っている」と言つたときに、本当に一番困る一言が、「やっぱりそうでしたか」と言われるのが、「知つていたのか」というところで、それはやっぱり子どもの施設です。それで、それによって子どもたちが、もしかして、子どもに悪影響を与えることもありますし、⁽²²⁴⁾そういう情報というのは前もって教えていただきたいなというのは、常々思つていますね。その辺りが、学生の状況が、僕らも最初のペーパーとレポートから、レポートだけ見ても、「ちよつとこの学生、大丈夫かな」という方がたまにいます。聞いただけでも、何日かやっていく中で、結構、学生が生々しく自分の体験を語り始めたりとかして、僕らは、子どもの支援ではなくて、学生の話の話を聞かなくていいときも、それを⁽²²⁴⁾大学にいったときに、「ああ、やっぱりそうでしたか」と言われるのが、一番つらいかなとい
--	--

	うところですね。	
保護者支援の理解・経験	施①：⁽²⁴²⁾<u>実際の経験</u>というところでは、やはり積んでいただきたいくところがありますし、あと、⁽²⁴³⁾<u>実際に目にしていただきたく場面</u>というのなかなかないのが現状になっています。 ⁽²³⁸⁾<u>毎月、支援計画というものを検討していますので、そういったものを読んでいただく中で、家族に対する支援の部分も計画立てをしていますので、そういったところで、「ああ、実際、こういうことが行われているんだ」というのは、守秘義務の下、見ていただいているのみというような現状にはなるんですけれども。</u> やはり学生の中には質問をされる方もいらっしゃいますので、具体的なことは控えておりますが、実際の部分で、ケース概要が分らない範囲で、「やっぱりさままさな事情が、いろんな事情があるよね。虐待であったり、学校と一緒に過ごすことが経済的に難しかったりという、いろんなことが、学校の授業の中で話もあったと思うけれども、ある中で、お預かりしているし、でも、やっぱり親御さんとの関わりはあるし」という、⁽²³⁷⁾<u>私たちの実践を言葉でお知らせしたり</u>というところで補っている現状かなというふうに思います。 施②：実習生のことでないですけども、うちは職員の親睦旅行みたいな中で2時間ほど何らかの研修をします。⁽²³⁹⁾<u>見学</u>したり、⁽²⁴⁰⁾<u>DVDを視聴したり</u>とかで。僕が若い世代にどうしてもこれを触れさせたかったというのが、先ごろもリメークされた某作家の『○○(作品名)』。要するに「離婚が増えた、再婚も増えた、その影響が子どもに」というのは、字義で学ぶだけでなく、あくまでフィクションかもしれないけれども、シーンの中で児童相談所が出てきて、こういう子が入ってくるというのを、やっぱり今の平成生まれの世代とかに触れさせたりはちよつと意識していて、「ああいうのは、ひよつとしたら学校でも使えるのではないか」などと思ったりします。⁽²⁴¹⁾<u>何かディスプレイションをさせる</u>、そういう勉強のときに。 養②：私どものところでは、⁽²²⁶⁾<u>背景についてお尋ねをする</u>ようにという。⁽²³⁶⁾<u>質問をさせていた</u>でいて、⁽²²⁷⁾<u>説明をしていただく</u>という形で。⁽²³⁵⁾<u>体験する</u>ということは、やはり、もうほとんどできでない状況にありますので、⁽²²⁷⁾<u>職員の方からレクチャー</u>をしていただく内容の中に必ず入れるようにはしています。このことは、ちよつと、やはり難しいものではないかというふうに思っています。 養①：本学も同様になります。やはり⁽²³⁵⁾<u>実習で体験する</u>ということは難しいと感じております。 ただ、授業の中で、例えば虐待等に触れた場合には、やはり学生の考え方を	施②：カリキュラムの中で、子どもたちが、例えば、面会に行くとき、面会、外出とかの場面に、できれば、学生を本当は立ち会わせたいんですけども、⁽²⁴²⁾<u>計画としてはあるんですけども、難しい</u>。やっぱり職員との関係の中で、また保護者によってはすごく難しい方もいらっしゃるので、この保護者について、は、ちよつと具体的な体験ではなくて、どうしても⁽²³⁷⁾<u>講義</u>というか、「こういうふうな形で、今、交流している」とか、「こういう保護者対応をしていく」しかできなくて、⁽²³⁸⁾<u>電話対応とかを横で聞いてもら</u>うとかは、そこはできるんですけども、ちよつとその辺ですけど、これは、本当は難しい。これは取り組めなくて。 施①：月に一遍ぐらい帰れる子が、お母さんか、お父さんが迎えに来るぐらいしか保護者は来ませんので、保護者支援について、実習生に対する経験とか支援の一環として、そこところというのは、全くうちは教えていません。⁽²³⁷⁾<u>「こういう形のニーズがあるんだよ」という話はするんですけども、その一つ一つの家庭が抱えている部分に対しては、全く差はありません。</u> 小さな寮と、これから将来を展望しなきゃいけない。特に、特別養護、特別支援学校の1年、2年、3年になってくると、児童施設なので。全国的に、加齢児って、18以上で残っているという現状があるんですけども、うちは18歳以上作っていないんです。その3年間でご家庭と行政といういろんなことをやって探していくんです。「この方だったら、その先、おうちには帰れないけれども、グループホームだったら、大丈夫」とか、「この人は障害の程度が重いかから、やはり入所型の施設、うちの成人部みたいないところしか駄目だ」みたいなところはいいんですけども、保護者支援みたいないところに関しても、やっぱり難しいです。 うちの場合は、成人部もあるし、入所型の施設としては、某自治体では一番、グループホームを持っていますので。相談支援だけはしっかりさせているんです。だから、そういうところの話はできますけれども。 養②：学生は、子どもたちが施設の後、どこに行くのかなんていうところでは、「やはり家庭を目指して、そのために行政機関なんかと連携しながら、いろいろやっているんだよ」ということはほかの授業なんかで伝えたりですとか、あとは、家庭支援専門相談員なんか配置されていますので、⁽²²⁸⁾<u>「そういう組織の人には会いました」とか、「見掛けました」</u>なんていうことを訪問のときに伝えたりすることがあります。そうすると、何か、保護者らしき人、あるいは、もしかしたら、里親の人かもしれないみたいな感じで、⁽²²⁹⁾<u>ちよつと意識する</u>ということがあるという、そのくらいですよね。 養①：そうですね。母子の施設ですと、「少し事務仕事をしているふりをする

	として「虐待＝悪」みたいな、善悪の判断みたいな形になりますので、そこに行き着かないようにだけは授業の中で話してはいます。⁽²³¹⁾<u>その行動に至った背景を理解していく</u>であったりとか、⁽²³²⁾<u>そういうふうにならざらないといけなかった理由等を考えて</u>いて、そこも含めての保護者支援なんだという。これは一般論にしかならないんですが、そういうふうなことをちゃんと考えられるように、いい悪いとかという考え方はなく、そういうふうには⁽²³³⁾<u>授業の中では意識しながら伝えている</u>つもりではあります。 養①：ささまざまな種別に実習としては行かせていただきましたので、その種別ごとに小グループをつくりまして、実習を、もちろん守秘義務には配慮をさせていたんですが、⁽²⁴⁴⁾<u>どんなことを経験したのか</u>、⁽²⁴⁷⁾<u>どういうふうな指導を受けたのか</u>等々についての⁽²⁴⁶⁾<u>グループワーク</u>を、まず帰ってきて、すぐにさせていたでいます。その振り返りをさせていたんだけどともに、またそれぞれの実習先に行ったグループごとで⁽²⁴⁵⁾<u>レポート</u>を 1 本まとめまして、それに対して⁽²⁷⁰⁾<u>報告会</u>のような形を催させていただきます。「私たちは、こういうところに行かせていただいて、このようなご利用児の方が生活がされていて、こういうことを学びました」ということを、全ての施設で発表の機会を持つてないんですが、何ケースかを全体に対して話す時間を持っています。 また、実習前に個別の課題をそれぞれ考えていますので、その個別の課題について、これは個人ワークとしまして⁽²⁶³⁾<u>自己振り返り</u>ということでの課題提出をするという。大きくは 3 つが事後指導をさせていたでいるポイントです。 養②：私どもも重なるのですが、それぞれのグループをつくって⁽²⁴⁵⁾<u>体験の感想</u>を述べたりとか、そういう簡単なグループワークの後に、私どもの場合には全ての⁽²⁶⁵⁾<u>実習先ごとに発表のレポート</u>をまとめまして、それは全部の施設にいた全部の学生が、⁽²⁶⁹⁾<u>全部のグループが発表</u>を行います。施設のほうに「こういった形で発表を行うようにしている」ということを事前に書類でお伝えしておいていて、発表前にレポートを確認したいというところについては、現場の⁽²⁷⁹⁾<u>職員ともやりとりしながらレポートを作成</u>しています。 それで、発表が終わった後、発表の内容、そこで出た質問などを、別のグループの学生で役割を決めまして、そこでの質疑の内容と、それから発表内容で分かったこと、分からないこととこののを、調査票を作りまして、発表自体の評価をまとめさせています。 そのグループのレポート、発表レポートと、それから発表会で出していた質問と、それに対する学生の答えとを全て記録したものを、⁽²⁷⁶⁾<u>施設のほうにフィードバック</u>をするというところで、最後、事後指導を終えるような形にしています。 施設のほうからは、事後指導の際に学生が作ったレポート、それから質疑の内容等について⁽²⁷⁷⁾<u>コメントシート</u>を返していただくようお願いしている
事後指導	がら、やりとりを聞いていて」というようなことで、⁽²⁵⁰⁾<u>実際の場面にちよつと</u>いさせてもらえるようなことはあるようですけれども、やはり児童養護とか障害者の施設はほとんどないですし、正直なところ、ここまで学生に実習指導を求めているんです。話がしていただければ、聞くことはあるかもしれないですけれども、実際、保育所の実習でも、保護者支援のところは難しいので、⁽²³⁴⁾<u>帰ってきてから、「実際の仕事は子どもだけじゃないよ」というようなところを伝える</u>ところか、現状としては、限界かなというふうに思っています。 養①：事後指導に力を入れようと思って、県内の何校の先生で事後指導に特化したテキストを作って、とにかく振り返りをきちんとする。⁽²⁶⁰⁾<u>できたこともできなかったことも振り返る</u>ということ、⁽²⁶³⁾<u>振り返りシート</u>を作って、それを自分で記入することによって、⁽²⁶²⁾<u>どういうふうなところに学びがあつて、これからの課題がどこにあるのか</u>ということを伝えて、考える機会を設けています。 帰ってきて初回の授業は、「私も聞かないから、悪口でも何でもいいから、ぶっちゃけなさい」と、「その代わり、以降、絶対悪口とか批判をするな」と。一つ一つの職員さんのいろいろいる関わりとか、いろいろかながあったと思うけれども、⁽²⁴⁸⁾<u>自分の学びも含めて、必ず背景がある</u>。思いがすぐくやっばりあるので、とにかく思いを吐き出して、以降は、きちんとその⁽²⁵⁰⁾<u>自分の言動や子どもへの関わり等を冷静に客観的に分析</u>をする。 グループで取り組むことも多いんですけど、どうしても、今まで「保育所保育士とは何か」、「施設保育士とは何か」という視点で事後指導をしていたんですけれども、⁽²⁶⁴⁾<u>援助職としての共通項</u>というのをきちんと学生自身が発見をして、⁽²⁵⁴⁾<u>その上に、対象児童や障害者、障害児というそれぞれの専門性がどう乗っかってくるか</u>というところを考えられるようなことをしています。生活というところを、やっぱりそこも一貫して話をすることによって、事前指導のところから、そこはぶれないようにやろうかなと思っています。 まず振り返りシートを自分で記入し、それをグループでまた持ち合いながら、発表を各学生がそれぞれでして、それに対して、学生同士でやりとりをして、「それは、何でそう思ったの?」とか、実際はそんなに盛り上がりがないんですけれども、⁽²⁶¹⁾<u>自分の同じような体験</u>をして、<u>感じ方が違ったりとか</u>、⁽²⁶²⁾<u>そこで頂いたアドバイスが違ったりすると、⁽²⁵³⁾疑似的な体験につながる</u>。I の保育所と施設が終わった段階で、⁽²⁶⁵⁾<u>保育者であると同時に援助者であるということ</u>を意識して、⁽²⁷³⁾<u>実習Ⅱまたは実習Ⅲに向けて実習の課題をどう設定するか</u>というところなんですね。で、実習Ⅱ、実習Ⅲに言ううと、本学の場合ですと、エピソードを文集にしているの、それを書くための材料をきちんと乗っけてきて、そこも、それは本当にやりとりをしながら、形にしています。 150 人ぐらいなんですけれども、全員分、目を通すので。ただ、それもいいろ工夫をして、まず⁽²⁶⁷⁾<u>グループの中で学生同士で読ませて</u>、おかしいところをそれぞれで指摘をして、ある程度文章になったものを見る。でも、すぐく

	ます。これは全部から返ってくるわけではないんですけど、丁寧に見て返してくださるところも複数あって、⁽²⁷⁶⁾<u>説明が足りなかったというようなところでは追加の資料</u>をいただいたりすることもありますので、それはまた返していくようにしています。 その後で、レポート発表と施設から戻ってきたものを見ながら、翌年、実習を予定している⁽²⁷²⁾<u>次の学年に向けたポスター発表</u>を全グループが行うというような形で事後指導を行っています。 それと、もう一つは、⁽²⁵⁸⁾<u>個別面談</u>等を行うんですけども。これは、実は実習評価について、私どもは全部、公開というか、⁽²⁵⁸⁾<u>本人に評価票を公開</u>するようにして、本人に対して面接を付けて評価表を開示しています。自分の評価表については開示をするという形を取っています。その開示を行う面接の前に、自分自身で、施設が自分に対して行ってくださる評価表と同じ様式で⁽²⁵⁷⁾<u>自分の評価を付けてきてもらって、⁽²⁵⁹⁾それと比較する形で、学生の実感と、それから施設からの評価というのを擦り合わせる作業</u>というのも行っているところなんです。	気付きはあるんですけども、短大生の特徴なのか、それを言語化するということが難しいので、そこところか、せかかくの学びがちょっとなかなか次のつながらないところかというところが課題だと思います 養②：事後指導はとても重要だと思います、⁽²⁷⁰⁾<u>まだ不十分だということ</u>は感じています。<u>短い期間ですけれども、本当に⁽²⁶⁴⁾さまざまな経験をしてきたところから、何をくみ取っていくのかと、学生の中では、事後指導でさらに問われてくると思いますけれども、それと、学生の中では、現場で実習をしてきたときには、⁽²⁶²⁾自分の個別課題を見つけたり、⁽²⁶¹⁾自分の持味とか、自分には足りない点なんかを意識して、ここをもう少し今後学んでいこうというふうに思っていたにもかかわらず、帰ってくると、すごく一般的な課題に退化してしまいうことがあるんですね。「もっと、何か、発達について知識を深めなきゃ、そんなの、もっと前の話でしようという感じの話に退化する人もいますので、そういったふうにならないためにいろいろやってはいます。</u> 施設実習の実習先を確保するのはとても難しく、五月雨式に出している。それで保育所と施設は別にやっています、施設の場合には、早く行った人ときに行っていない人がいる段階で、まず最初の振り返りができます。そのときには、行った人が「どういうふうに取り組んだら、自分の学びが深まりました」ということを話してもらったりして、⁽²⁷¹⁾<u>次に行く人に生かしたり</u>ということをしたりしています。 ⁽²⁶⁶⁾<u>施設は種別がたくさんありますので、やっぱりグループワークをするんですけれども、乳児院とか、児童養護施設とか、混合グループにして、それで最初是一緒のグループにします。同じ乳児院でも結構違ったりします。そのでして、混合グループにして、⁽²⁶⁰⁾施設によって保育士の働きが違いうことを学ぶ機会</u>になっている。 ⁽²⁶⁸⁾<u>事例報告シート</u>とか、⁽²⁶³⁾<u>自分の学びと向き合うシート</u>みたいなものを作って、それがしっかりと自分の取り組みを振り返って、この⁽²⁶⁸⁾<u>事例検討会</u>みたいなことを小グループで行って、最終的に⁽²⁶⁴⁾<u>実習報告書</u>みたいなのところも作成するところに至る。 4 年制大学で 4 年次に卒業研究が必修になっていますので、学生によっては、結構、実習で経験してきたことを深めて、⁽²⁷⁴⁾<u>卒業研究に自分のテーマを設定</u>して、それでさらに深めていく学生もいます。施設に関しては、1 割にも満たないです。 施②：そういった取り組みをしていただいているだけでも、実習が終わった直後というのは、少し気持ちが高ぶっていると思うんですけども、そういったところで、そういった取り組みをしていただけると、すごく振り返りとしては、悪口を言わせるとか、そういう、僕も実習のときに、自分自身がこれは言えないこととときちんとまとめることというふうにやっていたんですけども、⁽²⁸¹⁾<u>面白い取り組みだな</u>と思いました。
--	--	---

		施①：大学によつては、その⁽²⁸¹⁾実習報告書を打ってくださるんですね。僕は読むのが好きでした。で、ほかの、僕もよく⁽²⁸²⁾知っている施設のところも<u>読んで</u>。やっぱり経験して、その後、その人がそれをどう自分の学びとして自分の中に収めるかというのはとても大事なことで、大学の先生たちは大変だなと。
実習評価	養①：評価のときに参考にさせていたのは、⁽²⁸³⁾実習先から返ってきた<u>評価表</u>、また先ほど説明させていただきました⁽²⁸⁹⁾事後指導、または<u>実習前の授業等の内容</u>にはなってるんですが。 あと、⁽²⁹⁰⁾実習中に訪問させていただいた教員の、実際に会ったの表情であったりとか、そのときにいただいた指導内容であったりとか、そのときに⁽²⁹²⁾学生に自己評価等をさせて、その後中間で後半に向けての課題等であつたりとかを確認しますが、それらを総合的に合わせて評価はさせていただきます。 施②：養②の先生が言われたアウトプットの場合は、かなりいいんじゃないでしょうか。学生へ、それはいいんだと思いますので。ただ、僕も、事後指導のポイントが、うちはもう単純に1つだけで、⁽²⁹⁰⁾「あなたの中で何が変わったか」、それを自分で言葉にしてもらうようにしています。「意外と長いよ」と言ってもう、何分か話させます。で、整理させる作業といひましようか。そんなところですかね。実習評価も合わせてですか。 ⁽³¹²⁾実習評価は、職員は結構、厳しくしがちで、その厳しさを自分に向けていると思うときもあるくらいで、ちょっとそれは、どちらかというと心配しているくらいです。 施①：評価用紙に関して言えば、もう、かなり、やつぱり⁽³⁰⁵⁾学校によつてさまざまです。正直、⁽³⁰⁷⁾この内容をどう評価させてもらおうかと、困つてしまふと思うときはあります。やつぱり⁽³⁰⁸⁾ここまでの内容を学生に体験してもらえたらどうかという施設側の思いもありますし、⁽³⁰⁹⁾学生自身があることを学ぶつもりでいらしたのかどうかというかな。 よくあるのは⁽³¹⁰⁾地域支援です。実際、入所施設に入つていただく中で、子どもたちへの対応がメインになりますので、地域の方との関わりというのを実際に目にさせていただくことというのはかなり少ないです。口頭でお伝えはできますけれども、そこを実感してもらふようなプログラムも施設のほうで組めるといいのかなとは思ふんですけれども、それよりは、せつかく児童養護施設、乳児院、障害者の方の施設というところに来ていただく中で、やつぱり支援者としての、まず利用者さんとの部分というところを学んでいただくことがどうしてもメインになってしまうかなというふうに思う部分があります。地域支援の部分は、結構、悩むところではあつたりしますし。 事後指導で、私も⁽²⁸¹⁾フィードバックされてという部分は、施設側も、学校	養②：実習先に書いていただく評価表が戻ってきて、個別面談をするんです。Iで実習をして、その後、個別面談をして、IIとかIIIになぜいくという形です。そのときに、既に評価表が返ってきた場合には、それは直接的には学生には見せないんですけれども、実は、2とか、1とか、いるんですね。それで、「2だったよ」というのは言わないです。ただ、⁽²⁹³⁾「ここはどうだったの？」とか、「ここはどういうふうにやっていたの？」みたいなことを学生とやりとりをしながら、少し課題を意識してもらふみたいなのは、ちょっと短めの個別面談なんですけれども、そこで活用させていただいています。 やつぱり学生は自分がどういう評価だったのか、とても気にしていて、個別面談をしたときに、「まだ評価表が戻ってきていないんだよ」と言った学生は、「もう戻ってきてしまったか？」みたいなことを聞きに来たりして、最近の学生は、実は、⁽²⁹⁷⁾自己評価が高い人が結構多いんです。それで、でも、実際の評価は低い。「現場の先生が『本当にすごくしつかりと取り組んできたね』というふうに書いてあるよ」と言うとき、⁽²⁹⁶⁾ものすごくうれしそうなお返事はしますね。それが励みになっているんです。 施①：⁽³⁰²⁾基本的には、ネガティブな評価はしない。欠席してしまつたり、遅刻してしまつたりが何度もあったら駄目なんですけれども、ずっと同じ大学さんと連携させていたでいてるので、大学さんのほうもよく分かつてうちに出して下さつていますし、本当に「困つてしまつたな」というときは、やはり大学さんのほうに言うしかないんですけれども、ほぼそういうのがない。来る方は違ふわけですからね。で、そういった、さっき言つたみたいに、まだ19、20歳の方なので、ネガティブな評価をして、それでこういう仕事を嫌だなどと思われれば、⁽³⁰²⁾いいところを見つけて、それはもううちの利用者にとつても、若い職員もそうなんですけれども、そういう気持ちでいます。 ⁽³⁰¹⁾人生経験がないわけですから、自分の水準で、僕はよく分かっています。人事考課をやると、若い職員ほど自分を高く評価していますから。だけど、中堅どころ以上になると、⁽³⁰¹⁾だんだん周りが見えてくるから、自分がほかの人と比べてできていないところというのは客観的に分かるんですけれども、やつぱり、本当に職員でもそうですから。 養①：巡回で様子を伺い、実習記録にもコメントを頂き、評価表を頂き、何かちょっとご意見を頂戴するシートを別に設けていて、指導の体制とか、巡回の方法とか、そういうことも含めて、事務的なことも含めて、何かあればと書いて

	のほうで、その後、どういうふうに取り組みられているかというのがすごく見える形で教えていただけていて、すてきなというふうなふうに思いました。 実際、実習指導を実習記録等も全て指導をさせてもらって、⁽²⁸²⁾実習を終えて、その後、学校で、どういったふうな形で学生の学びが深まっていっているのかというのは、なかなか知る機会も少なかつたりします。 やっぱり実習期間中に「⁽³⁰⁰⁾学生は今、学んで、育っていったらいい方たち」というふうな思ったりと、できないことだけではなくて、「これはうまいかなかなかつたけれども、でも、こういうふうにしたら、うまいよよね」というところを一緒に共有させてもらったり、どういうふうな伸ばしていったもてええるかというところも思いながら指導をしていますので、そういう部分でも、⁽²⁸³⁾学校のほうと施設が共通認識の下、学生の意欲を高めながら指導をさせていただけというふうな思っています。 実習評価の部分でも、やっぱり自身の評価と擦り合わせたのは、すごく大事なのかなと。学生自身は、すごく「こんなふうにならなかつた」と思っているけれども、施設の指導者のほうから思う部分が少しく違ったりすると、学校の教員のかたがたも、どういったことが起こっていたんだろうというふうな思われるかなというふうな思っています。 実習評価を記入する際にも、先ほど言いました、できないことを羅列するのではなくて、「⁽³⁰²⁾こういうふうな頑張れると、よかつた」というふうな思っています」ということはもちろんですけれども、「⁽³⁰³⁾こういうことが、すてきだった」というところも評価の中では記載するように気を付けています。 施②：もう一度。ちよつと現場で思い出したのが、本場に正直、いろいろ出してもろうていたんが、「⁽³⁰⁶⁾この様式は、もう印鑑ばかりだなあ」みたいな。LINEのスタンプとは違って、学生も児童期は保護者に押してもろうていたんやろうけれども、だんだん大人の社会にいくのに印鑑というものはなくなるし、大きな組織やと決着とか。 小さい社会は、正直に言うのと、そういうのも意外となかつたりする中で、これは、もつと養成の学校の先生が作ったんかというくらいで、「あんまり印鑑を押すやつは、ちよつと考えてほしい」と現場が言っていました。 施①：それ（フィードバック）をさせていただくことによって、⁽²⁸⁴⁾施設側も伝え切れていなかったことに気付けるんです。逆に、⁽²⁸⁵⁾思いがあつて伝えたことが、学生の認識の中で違うということも、やっぱりありますので、それを、そういった例を教えていただくことによって、施設側のそういう実習指導をしていく中でも、「あ、では⁽²⁸⁶⁾学生たちには、やっぱりこういう伝え方が効果的なんだ」という、よりよい実習指導につながる部分もあるかと思うので。 施②：これは、施設側としては、被送致児童と虐待。私たちも100点満点の
	ていただくんですけど、⁽²⁹⁰⁾全部が一致しないことがあつて、評価をお願いする際には、「最終的な評価は学校で付けるので、忌憚なきご意見を」ということをお願いをするんですが、現場では、めっちゃめちゃに言われて、「もう私、全然できませぬ」と言っただけで帰ってきてても、評価表はすごい良かったりとか。だから、もらったご意見のペーパーには、「どのような指導をしているんですか？」みたいなことが書かれていたりとか。書いている方が違うのか、ちよつとそこの辺が分からない。 本人と面談をして、記録を読んで、評価は付けているんですけども、そういうところを若干あるかなというのが1点で、そんなところも、それは学校の課題でもあるんですけども、評価というのはやっぱ難しいと感じる。発達に課題を抱える学生がかなり増えていて、20歳の今の状況では、やっぱり現場に出ることが難しいと。行かせない理由がないので、実習にはお話をしてお願いをするんだけど、やはり⁽²⁹⁴⁾適性ということではなく、⁽²⁹⁵⁾これからなるために、その学生がどういうところを身に付けていくのかということとを考える機会だと思つたので、「未来ある学生なので、不可は付けません」と言つて、不可は付かないんですけども、講師は限りなく不可に近い。それはもう記録、ちよつと実際の例を出してあれなんですけれども、施設に実習に行つた学生は、本場に出るときもすつたんですけども、海岸の清掃に行つた日の状況話を話して受けていただいたんですけども、海岸の清掃に行つた日のこととが記録に書いてあつて、その日の考察に、「今日は、海岸にごみ拾いに行きました。僕も、あ、僕と言つてしまつた。僕もこれからごみの分別をしつかりしようと思ひました」といつて書いてきたんですけど。「いやいやいや、何しに行つたのよ」と、そこに対してコメントは書いてくださつていてるんですけども、もちろん、そこは丁寧に指導してくださつたんですが、いや、考察、感想でも、そこは本場に自分の感想なので、ごみ拾いをした感想なので、「そのレベルはやっぱりまずいよね」というところが1件、2件、やっぱりうちのほうにあつて、「最後の責任は私たちが取るのよ」ということで、評価を付けないで返してもらつたというふうな方法で、今、やつていて、その辺のやりとりが難しいなというふうな感じています。 施②：担当者が3と言つたら、それは4にする、みたいな、4とか5にするみたいな感覚で、⁽³⁰⁴⁾基本的に学生がやる気が持てるような形で評価をしているというのは、園としても統一していますので、本場によつたことじゃない限りは、大体3が付いている学生はもう相当まずいという感じの、4か、5の感じにうちではしているのよ、とにかく⁽³⁰⁴⁾学生がやる気が出るような形で、あと、具体的に書いてあげるといふことを意識しています。 保育実習と社会福祉実習を受けているんですけども、保育実習で、実習の段階を3段階に設定していて、1段階と2段階はケアワーク中心で、3段階目からケースワークの試験を取り入れていっているんですけども、保育実習の方

	ことをしているわけじゃないから、やっぱりこの考えが入ってから、何か不適切な関わりというのがなかったかというのは、かなりセンシティブだけれども聞かざるを得なくて、⁽³²⁷⁾「あのときは、なぜ、あややったのか」というのがたまたま出て、説明責任を求められるときもありました。実習が終わってからは、どちらかというと、学生よりも、その後、ノートのやりとりとかで、施設が、もう済んだこととして⁽³¹¹⁾施設のほうで学生に返すのが遅れがちなところがあるから、現場の職員がよく怒ることが多いですけども。	たちは 2 段階までなんですけれども、このケースワークの個別援助計画であつたりとか、ちよつとケースワークの試験を入れていく実習というのは社会福祉士のみなんですけれども、この辺りは、保育実習のほうでも入れていったほうがいいんですかね。 就職に直結するので、そこは学生の希望だと思ふんですけども、もし⁽²⁹⁹⁾本人が本場にそのまま現場に出るということを考えていれば、もう少しお話を頂けるといいのかなとは。
実習Ⅰと実習Ⅲの違い	施①：2 度目の実習の場合は、もう他の施設も経験されていますので、そういう社会的養護の施設と、例えば⁽³²⁸⁾保育所の違いに着目しながら実習されている学生も多いのかというふうに思っていますので、そこで⁽³³⁰⁾ステップアップされている学生というふうに捉えて、やっぱりお話しする⁽³²⁹⁾内容を少し変化させたりという部分もありますし。 実習Ⅰだと、まず実習に来て、子どもたちとの関わりにてんやわんやして、その中で、ちよつとこんなふうにできたというところまでで 10 日間が終わってしまうのかというふうに思いますので、本来ならば、やはり施設にも 2 回くらい来てもらえらるほうが、学生の中でも⁽³³¹⁾いろんな理解が深まるんじゃないかと思ひますけれども、そういった⁽³³²⁾指導の工夫というのは施設のほうも意識していかないといけないかなというふうには思ひます。 施②：施設によってはⅠとⅢの区分を明確にしているところもあると聞きます。⁽³³³⁾うちは、そこまでそれほど、まだできていません。この間、同時にⅠとⅢを受けたときは、やっぱり⁽³³⁴⁾職員のほうも混乱した様子がありましたので。そのくらいの現状ですかね。	
	養①：Ⅲのほうでは、やはり、⁽³¹⁴⁾もう少し深めた内容というところを私自身も考えておりますので、指導計画まではいいけないですが、その触り、あとは⁽³¹³⁾個別支援計画等を考えていくということを学生自身に考えさせる。 あとは、課題をもう⁽³¹⁷⁾少し深めた課題にして、そこについて調べをしていくということを意識はしています。ただ、実際の実習になりますと、私の個人の意見としては、種別の違うところに行かせています。というのも、さまざまな種別を経験していただくためにです。そうなりますと、⁽³²²⁾その種別では初めての 10 日間になりますので、⁽³²⁴⁾やはり実習の内容としますと、Ⅰが少し深まったかなというくらいにはなっています。 逆に、じゃあ、そこでⅢだから、より深めてというふうな内容になると、学生も、まず子どもたちに対応するところまで、てんやわんや。そこに、実習が難しく、てんやわんやというふうになりますので。実際にⅢは、こういう深まりという「たてり」がある反面、実際の私の指導も不足はしていますし、⁽³²⁷⁾実習の経験としても少し難しい部分があるとは個人的には思っております。	

	養②：短期大学のほうに、以前、勤務しておりましたので、同じ本学の短期大学のほうでは、⁽³¹⁸⁾<u>施設に就職を希望している学生がほぼⅢを履修する</u>というような、はっきりした特徴があって。⁽³¹⁹⁾<u>人数的にも3人とか2人とか、非常に少ない人数でしたので、⁽³²³⁾施設のほうにⅠと違う内容をお願いするということではできない</u>というのが事実上の状況で、⁽³²⁴⁾<u>ほぼⅠと同様の内容にならざるを得ない</u>というか、⁽³²⁵⁾<u>ⅠとⅢで違ったものを用意できるとい</u><u>うところは、その当時でも、今も恐らくそんなにたくさんはない</u>と思うんですけれども、1カ所しかなくて。 本学の、これには実習時期の関係で、それが難しかったので、Ⅰ、こちらのほうで、先ほど養①の先生が言われたみたいに⁽³¹⁶⁾<u>Ⅰで経験したことをどの程度、梁められるか</u>、少し授業の中で、事前指導でレクチャーするという形で、⁽³²⁰⁾<u>学生自身が、梁められるような学生であればできると</u>すけれども、⁽³²¹⁾<u>そうでない場合は、なかなか、Ⅰが2回という状況になっていたん</u><u>じやないかな</u>というふうには思っているところですよ。すいません。
養成校と現場の実習指導者の専門性と研修	施②：難しいな。児童福祉をしているんですけども、ちよつと広義の意味での社会福祉、高齢介護、障害または保育も入れて、それこそ多数派です。どちらかというと、社会的養護は全体の、2 万ほど社会福祉法人がありますけれども、かなりニッチなそれです。でも、児童の施設から来て、それを実習指導する指導をするのだけけれども、ちよつと⁽³⁶⁶⁾<u>俯瞰的な社会福祉みたいなもの実習担当者は持っていない</u>かったら、<u>やっぱうまうまく対話にならない</u>じやないかなかなと最近思ったりするので。 やっぱこの 10 年、20 年は、社会福祉基礎構造改革を含めて、もう目まぐるしく法改正をされているので、経験年数が長い人が優れているかというたら、もう、そこで学ばなかったら、単に古くなっている人もいますから。最近の教材で学んでいる人のほんがフィットしやすい人とかもいるので、やっぱ実習指導者は全体のそういう感覚というのは必要だとは思います。 施②：はいそうです（保育士実習のみ受け入れかどうか。） 施①：やはり人と接する仕事というところで、他のさまざまな資格と違うのは、⁽³⁶⁵⁾<u>いろいろな方法、支援方法があったり、⁽³⁶⁰⁾答えが明確にあるものではない</u>というところで、⁽³⁶¹⁾<u>理解を深めていくところ</u>がすごく難しいこととで、⁽³⁶²⁾<u>逆に、すごく貴重な体験</u>をしていくものかなというのが個人的に思っている部分であるんですけども。私も、なかなかうまく言えないところもあって、申し訳ないんですけども。 やっぱ大学のほうで、近県の大学を受けることが多いんですけども、各大学でも⁽³⁶⁷⁾<u>実習懇談会</u>という形で施設にお声掛けいただくことも多いです。そういった場にはできるだけ参加させていただくようにしています。そういつた中で、⁽³⁶⁸⁾<u>施設のほうで実習生に対して感じている思いであ</u><u>るとか考え</u>というところをお話しさせていただくことで、<u>学校との共通認識</u>
	施①：中間管理職がやっている。中間管理職は、実は、そういう意味で言ったら、もうそこまですることができる人たち。もう⁽³⁶⁶⁾<u>実習担当の中間管理職</u>ということは、「大学に対しては、君たちがこの法人の顔なんだぞ」というのは、中間管理職には口酸っぱく言っていて、実習のところというのは、うちの児童で言ったら、それまで実習担当を 10 年ぐらいやっていたのが、今、施設長にいるんですけれども、⁽³⁶⁹⁾<u>もうその教育です</u>。 一番いいのは、そのときに 1 年間来る生徒を自分のところと呼んで、先生ごとオリエンテーションするのが本当が一番いい。⁽³⁶⁹⁾<u>実習担当の先生が一番最初のオリエンテーションと一緒に来て、オリエンテーションを受けるのが一番いいんです</u>。 ⁽³⁶⁴⁾<u>ある大学は、実習の前に、3 時間、僕のところで授業をするんです</u>。今、2つの大学さんが出ているんですけども、それは、ひとまず、見学もそうなんですけれども、うちは一番古いので、うちの歴史、イコール、知的障害者の歴史なので、その大学は、これから実習に出るクラスは、みんなうちに来て、だから、30 人、40 人、50 人なんですけれども、ひとまず、僕の講義をじかに受けて、それでその後、うちの施設がどういうところかをやっていただと、実習生もうちよつと、自分たちだけで来るよりは、あまりびくびくせずに来られるんです。 施②：僕が受けた実習指導者講習会の講習でやっていたのに、⁽³⁵⁷⁾<u>ロールプレイで学生の立場に、学生役をやると</u>いうのをやったときに、それは初めて訪問する場面とかをやったときに、⁽³⁵⁸⁾<u>結構、何も分らない学生に対して、ちよつとレベルの高いことを言ってしまった</u>っている自分がいたり、<u>気があつたり</u>とかしたので、そういうロールプレーとかかというのは、研修の中では、僕はすごく役に立ったのかなと思って、そういつたところをあらためて、分らないですけれども、養成校の先生は、多分、そういうのを受けていて、理解さ

	が生まれたり連携が生まれたり、また、じゃあ学生指導というところで、どいうふうな⁽³⁶³⁾専門知識といますか、<u>専門的な力を発揮</u>していただければいいのかなというところは、日々、勉強をさせていたいただいているというふうに思っています。 養①：私自身、力足りず、日々、勉強です。やはり支援についても知識について日進月歩ですので、⁽³⁴³⁾私自身が研修に出させていただいで勉強をしないと、<u>学生自身に現場のことを伝えられないかな</u>というふうに思っております。 　　：ありがとうございます、⁽³⁴⁴⁾SCとして現場に出る機会もありますので、そこで今⁽³⁴⁵⁾現状の施設の職員の方とお話をさせていただいたり、⁽³⁴⁶⁾利用児者の方、特に知の方にはなりますが、<u>そういう方と触れ合いながら、⁽³⁴⁷⁾支援のことであつたりとか、⁽³⁴⁸⁾保護者の気持ちであつたり、あとは⁽³⁴⁹⁾職員の考え方であつたりとか、そこに触れて、その情報を学生自身には伝えさせていただくようにしている程度にはなっております。</u> 　　：また、一番、意識しているのは、⁽³⁵⁰⁾保育士のための実習というところを一番には考えております。やはり得てして施設職員のための実習とかになつてしまいますと、保育士とはちよつと違うというか、⁽³⁵²⁾より専門性を求められてしまう施設もありますので、この積み重ねが将来像としては、もちろん対人援助職にはなるんですが、保育士というところに行き着く、そのための実習のⅠであつて。 　　：もちろん環境の構造化であつたりとか、視覚に訴えるであつたりとか、さまざまな部分が、私としては保育所であつたりとか保育士としての専門性にながつてくると考えているので、そこを見いだしながら、実習としては伝えていくつもりです、⁽³⁵⁶⁾そこところの意識を自分自身も持って知識を深めていかないといいかなとは思っております。 養②：個人としてのということでもないんですけども、県の場合は、私自身も実習指導というのは、⁽³³⁸⁾1年目は私は、<u>保育士の資格は持っていない状況で教壇に立つことになつた</u>んですけども、〇〇協議会が年に5回程度ありまして、そのときに、⁽³³⁸⁾実習指導の方法⁽³³⁷⁾についても、もう自分の学校の枠を超えて、⁽³³⁹⁾同じ実習を担当している者同士で情報交換をしたりとか、⁽³³⁸⁾教材についても相談をすることもできました。そういう意味では、今も⁽³⁴⁰⁾非常に密な、いい関係性が築けておりまして、その中で⁽³⁴¹⁾一定の底上げというか、そこが、いわゆる⁽³⁴²⁾研修のような役割も私たちにとっては持っているんじゃないかというところもあります。こういう場がある。 　　：懇談会への参加で、先ほどのフィードバックのものも、別に私のオリジナルというものではなくて、委員会が主催している⁽³⁵¹⁾実習懇談会の席で、⁽³⁵³⁾施設の職員さんの側からご提案があつて、それを自分のところで工夫したという形なので。やっぱり一つは養成校間での実習担当者同士の⁽³⁵⁴⁾意見交流	れていると思うんですけども、何か、そういうのが良かったかなというふうに思っています。
--	---	---

	の場、実際に交流の場があるということと、それと、そこでの、考えていることなどを施設の実習担当のかたがたと⁽³⁶⁵⁾<u>交流する機会がきちんと位置付けられているということが大事</u>なんじゃないのかなというふうに思っています。
有識者のコメント	有識者 A：今、他の資格の中で福祉教育こそという質問をされたときの問題だと、もう、きつと保育士を出しておられるところの大学・短大のほとんどが幼稚園教諭、まして私学はほぼ全て取れたという状況であったときに、いろんな先生方がいらっちゃって。なので、保育士と幼稚園教諭、ここがやっぱり中心の意識に教員側がなっているんじゃないだろうかと思っています。 最近では、これから果たして保育教諭がどうなっていくんだろうかという。あくまでも就学前のところ、ずつとセットになっていく部分についていないと言うと、学生もそうだし、教員側もまだ十分な関心を。軽視はしていないと思うんだけれども、じゃあ、そこに力点を置いて何ができますかというところ、社会福祉士なり社会福祉系の大学を出られた先生方は、ある程度、意識しているような気がするんだけれども。例えば心理学とか、技術系のピアノとか、あるいは教育観までされたとかは、ほとんどとしては入れておられるとは思いますが、十分な現場とのつながりも恐らくそんなにないはずだし、その弱さをどうカバーするか。 ましてや、学生もそんなに施設に行かないと。実習に行かなければ就職もなかなかできないという状況下で、そのつながりが弱くなるというのがあるが、やっぱり専門の保育士というのはプライドも。 法律上は 18 歳だけれども、今で言うともう 22 歳まで学校がある可能性が制度上は出てきたという。極端な言い方をすると、⁽³⁷⁰⁾<u>自分と同世代のところに関わっていないか</u>ないといけない。そうすると、一番、今日の話のスタートにあった⁽³⁷⁰⁾<u>倫理観とか人権問題です</u>よね。男女というふうな組み合わせに<u>なったり、女性同士、男性同士もあり得るけれども、そこら辺の問題を</u>。乳幼児期でも当然、起こり得るけれども、思春期はより起こりやすいし、ましてや、ほぼ同年齢になってきた今は。だから、こういうので、その辺のところを含めたものを。 福祉系と保育そのもので育ててこられた先生方は、ある程度、意識しておられるけれども、そうでない領域から偶然、仕事先として養成校に来られたとしたら、いずれ変わりたいと、元の自分の専門領域に帰りたいという人も、当然いっちゃるわけですが。それは自分のステップアップになるわけだから、否定はできないけれども、⁽³⁶⁹⁾<u>「でも今、あなたは、ここにいる限り、これが仕事なんですけれども」ということは、きっちり理解をしてももうよう</u><u>な、そういう意味での研修とか意識づくり</u>。技術的な研修や単なる知識ではなくて、⁽³⁶⁹⁾<u>自覚を持つ</u>というふうなところをきっちりやらやらないと。だから、いろんな難しいことが起こっているんじゃないだろうかというのが 1 点です。
	有識者 B：今回の目的は、保育現場で定着を図るということなので、大体よく言われているのは、社会的養護系、施設系に行く就職は、大体、大学は 5% と言われているので、100 人いて、施設系に行くのは、5 人から、多くて 10 人ですね。障害系も含めて。保育系以外のそういった社会的養護系に行くというのは、これぐらいの学生というところですよ。20 年前、30 年前の実習指導とは、本当に大きく、僕は教員になってもう 26 年目なんですけど、その当時の現場の先生方の認識と今の先生たちは相当変わってきた。それはもう社会福祉士とか介護士の養成が入ってきたことによる影響は大きいのではないかと。 昔は、もう叱咤激励じゃなく、叱咤。「あなた、何しに来たの?」と。でも、最近では、現場では、そういう声は聞かなくなってきた。さらに、毎日、実習をやらないときに、10 分でも 15 分でも反省会をしてくれる。実習を上がるときに、そこを聞いている、聞けるような職員の方々の配慮もあると思うんですが、「緊張して動けません」という学生は少なくなってきたという。それは⁽³⁸²⁾<u>現場の先生方の意識が大きく変わってきたこと</u>か。 現場の施設で、先生たちが今、就職していて、⁽⁴⁰⁹⁾<u>なぜこの職場を選んできたのか</u>、そして、<u>今、働いている喜びは何なのか</u>、そういうところを語ってほしい。そのことによって、学生たちは、そういう⁽⁴¹⁰⁾<u>先生たちの生き生きした姿を見て、「こういう現場で働いてみたい」、「こういう先生の所で働いてみたい」というふうに強く思う</u>。 施設実習の中で、特に知的は希望者が少ない。大体多いのが乳児院とかというの、赤ちゃんのケアができてからいいという希望者が多い。しかし、帰ってきて、学生自身の施設評価が低いのは、乳児院なんです。さっき言ったように、幼稚園が厳しいというのと同じような感じ。乳児院の場合には、「もうでるでしょう? 何でここまでできないの? これができないの?」というように。ただ男性学生が行くと緩いんです。これはいいか、悪いか、分かりませんが、男性だと、「ああ、できなくてしょうがないよね」というような感じで、男性が乳児院に実習に行くと、まあまあ評価をもらっているけれども、女性だと、同じ施設でもちよつと厳しかったりというように。乳児院の評価というのはちよつと厳しくて、逆に、知的障害者施設はやさしめです。 2 週間、ここに泊まって実習ができただけでオケー。「⁽³⁹⁶⁾<u>この世界に 2 週間、ここにただだけでもう十分だよ</u>」という。そして、それは、利用者との関係の中において、特に⁽³⁹⁷⁾<u>知的障害者施設の先生が、すぐゆつたりと利用者者と関わっていくのが特性</u>。だって、できないのが当たり前というところから、本当に⁽³⁹⁸⁾<u>小さな変化を読み取って、そこに光を当てながら、「ああ、これができるようになったね」</u>という。だから、特に知的障害者施設の中って言われるのは、その⁽³⁹⁸⁾<u>小さな変化を気付くかどうか</u>がはまるかどうか。その変

それから2点目ですけれども。やっぱり丁寧なプロセスでやっておられると。オリエンテーションとか、いろんなことをやっておられて。実習系のところは、きっと、私の経験で言うと、看護とかは、PTとかOTのところは一番、その辺が進んでいて、それから教育系が進んでいて、福祉系がちょっと遅れているんじゃないか。それでも、昔に比べると、すごく丁寧に間違いないくやるようになったと思うんです。そのことは評価したいんですけども。 その中で、さっき言った幼稚園教諭も、特に短大の2年間で、大抵、2つの資格を取って、資格免許を取っていかないといけないという状況で、時間の制限られてしまっ。それは、われわれのような外部の人間が、やはり専門職養成という立場で言うと、丁寧にやらないといけないし、時間をかけてやらないといけないのは当たり前なんですけれども、しかも、そこで質も高めようというのは当たり前なんですけれども、⁽³⁷⁷⁾学生の生活とかになったときに、「これは本当に大丈夫ですか」というのが私の中にある。やっぱり4大だったから、まだ、もうちょっと⁽³⁷⁸⁾時間的余裕が短大以上にあるけれども、でも、それはそれで、また他のこともやりたくなくてくるし。ましてや短大の学生たちは、そういう両方を取らないと、なかなか世の中で生きていけないという状況になったときに、⁽³⁷⁹⁾人としての自分を高める時間がどんどん減ってくるんだと思う。そういうゆったり、ゆる時間というか。特に児童養護施設とか知的障害児者の施設とかになると、そういう部分が意外と重要だったります。⁽³⁸⁰⁾人間性とか、人としての豊かさとか感性とか、その部分が養成の中で、養成校の問題と制度の問題ということで、制度そのものをどう見直していくかということに双方から提案をしていかないと。 もう僕らは、やっぱりそのように言っていましていいけれども。前だったら、同時に3〜4人が1つのクラスに入っていくんだしたら「おお、すごい実習」と思っただけけれども、もう、そんなことはしてられないというふうになったときに、現場のほうも結構、大変になりますよね。結構、実習に時間を取られるというので。しかも、このことは、ちょっと本当に聞いてみたあれだけれども、<u>施②の先生が言われたように、⁽³⁸¹⁾できるだけ配慮してあげたい</u>一方で、もう、ちよっと人生のコースに関わってきてしまう学生もおるわけです。私ども社会福祉養成でも、私は2度ほど経験したんですが、実習先で、実習評価でバツが来た場合、現場がバツと言っているのに、そこに資格を出すのか。われわれは、まだ社会福祉士は受験資格しか出していないからまだしも、保育士はそうはいかないんです。もう卒業資格認定になっているから、現場がバツを付けたものを大学側が覆せるかというと、これはなかなか大変で。 私の2度の経験は、2回とも、現場に「もう1回、実習をさせてほしい」と、「1週間だけ、もう1回、実習させてほしい」と。その提案で、1人はクリアだけれども、もう1人の学生は「もういいです」という、やめちやったという経験がありますので。⁽³⁷²⁾学力が低下していき、学生自身も⁽³⁷³⁾人間関	化に気付かなければ、「全く2週間いても何も分かりませんでした」というようなことになってしまう。ですから、帰ってきて、一番「はまる」のが知的障害者施設なんです。なぜかといえ、もうそれは、いわゆる⁽⁴⁰⁰⁾援助の原点だと。⁽⁴⁰¹⁾コミュニケーションがない人たちにどう関わったらいいか、そこをいろいろ考える。はまる学生は何かといったら、全く分らないところの中に、生活を共にしていく中で、この人の枠組みがだんだん分かってくると、あるいは、利用者は、「コーヒー」しか言わない。で、コーヒー違う。しかし、この状況の中で、「この『コーヒー』はこの意味があるんだ」とかいふようなことが分かってきたときに、その「コーヒー」と言われたときにその意味が分かっ、それに対応して、そこで⁽⁴⁰³⁾お互いが理解し合えたという、この体験をした学生ははまるんです。自分の中で⁽⁴⁰²⁾試行錯誤しながら、⁽⁴⁰⁴⁾この人はどんな、今、思いでいて、どういうことを求めているのかと考えるという、そういう中にあって、そこが試行錯誤しながらはまって、お互いが少し歩み寄れたというこの実感が持てた学生は、すごく面白いと言って、はまっていく。 実習だけに、全部がそこに完結するなんていうのはできないわけです。それは、われわれは4年間とか2年間のカリキュラムというのがあって、それぞれが全部関連があって、その中に実習というのが位置している。大事なのは、やっぱり事後指導だと思う。行く前にどんなことを言っても、やっても、実感がなくて分らない。だから、勝負は、実習に行ったら何を感じ、何を気付き、そこに大学側がきっちり学生と向き合って対応していく。⁽⁴¹⁴⁾そういう中に学生自身の深まり、<u>気付きが出て、それが次にステップアップしていける機会になるんじゃないか</u>。幾らやっていないところにもいろいろなことを話め込んでも、学生はほとんど分らないだろうと。だから、⁽⁴¹⁶⁾体験があって、初めてそこに理論化がされて、「ああ、このこと」。ですから、よく⁽⁴¹⁷⁾学生が卒業して行ったらときに、「ああ、先生たちが授業で言っていたのはこういうことだったんですね」というのは、まさにそこだと思うですね。ですから、大抵としては、「そこをしつかり」というふうな事後指導がやっぱり勝負ではないか。 取り組みの中で、⁽⁴¹²⁾実習の自身をカリキュラム化をしてという、これはすごく大事だと思うんですね。17年前に某自治体で教員をやっていたときに、某自治体は、これは社会福祉士のほうは全てを、やる内容を語る。それは新人さん向けに、どういうことを教えていったらいいのかわからないのを全部分析して、それを提示して、そういうものを、では、学生たちにどうそれらを学ばせるかということ。そうすると、⁽⁴¹³⁾何をやって、何をやらなかったかとか、何を話を聞いていなかったとか、<u>それが一つ一つチェックできる</u>ということ。ろでは、養護施設のところ、実習内容をカリキュラム化して、そういう中で⁽⁴¹⁵⁾一つ一つ積み上げていくというふうな、こういった取り組みも大事かなと、そういったところの一つ。 大学の先生に、教育に、「現場に来い」と言うけれども、これはなかなか難しいということだと思ふんですが、⁽³⁹⁴⁾大事なことは、<u>教員と現場の先生た</u>
--	---

	係が自分で取れないとなつたときに、保育現場、⁽³⁷⁴⁾実習現場でトラブルを起こしたり、あるいは予期せぬ、SNS などとかで個人的にやりとりする、非公開放でやる場合にはいいんではないかと思つているような人が、「何で、これが駄目なんですか」というのが、あるいは、私の経験で言うとか、電車の中で実習の話をしてしまつて、それが偶然、保護者が、隣とか、すぐそばに座つていて、「うちの施設、保育所の話をしていたような気がする」みたいな、というようになことが起こつてくる。⁽³⁷⁶⁾その辺の感覚の違いは今もおおしやつていまして、⁽³⁸³⁾その部分をきっちりやるための授業も必要なのかなということを思いました。 その中で考えた部分ですけれども、ベースの⁽³⁷⁰⁾倫理とか人権感覚があつて、これは時間の流れですけれども、そういう価値観と知識と技術があつて、これがともに共通のノート、実習先のものがあるんではないかと思つて。 実習先とか、例えば歴史とか価値観、考え方とか、大切にしておられるようなものというのは違ふわけですね。それから、技術的にも知的障害のところで求められる、こういうものは言わなければ、比較的、頻繁に使わざるを得ないものとか、そういう部分が事前にどこまで可能か。そこで実習で実感をして、それを記録と発表等で表現して、最後に振り返ると。 この振り返りが、最近、うちの大学で取り組んでいるのは、「⁽³⁸¹⁾あなたが事前に学んだ知識と技術との関係で振り返ってください」と。実習の振り返りは、結構、それなりに現場の先生方がすごく協力してくださつて、ある程度できるよつになつてきたと思ふんですが、ここをあんまり振り返つていないんです。ここをやると、意外と共通性、皆さんの施設との共通性とか、⁽³⁸¹⁾大切なものは一体何だったのかというものが分かつてくるというのがあつて、「どういう技術を使いましたか。あなたはこういう技法を使いましたか」というようなことをやってみると、意外と、ここはうまくいくんではないかというように今、話を聞いていて思いました。 それで1個1個の評価をしてみると、ちよつと修正が必要となる。例えば保育士と幼稚園教諭と重ねたときに、両方でやつていて。同じ学生が2回やつていて。1個1個に対して、こういう評価をして、よその大学を見るときに「うちはしていない。けれども、やつたほうがいいよね」とか、施設のほうからも同じようなものが出てくる可能性があつて。この時間を足し算することです。⁽³⁸²⁾総時間が出てくる。恐らく、これが⁽³⁸³⁾オーバーするはずなんです。⁽³⁸⁴⁾大学でできる範囲にするためには、では、どこを削つていくのか。その削り方には、絶対、削つてはいけないものがあったり、⁽³⁸⁵⁾大学とか施設で個別にやつていっているものの中から選択してもらつて、総時間を算出してもらえばいい。⁽³⁸⁶⁾削つていない時間部分と、削れる時間部分、本当にいろいろあるはずで。 つい「これが必要」という話ばかりして、「これは要りません」と言う勇氣がない。誰かが「いや、それは要るよ」と言われたら、増える話ばかりにな
	ちがコミュニケーションを取つていくことがすごく大事だ。そういう中にあるって、気になる学生であれば、そういった情報も伝えるながら、やりとりできる。ただ、現場のことが、そこにどつぱり伝えることはなかなか難しいので、こういうようになつて、先生のところは、幾つかの大学にも限られているということになつてしまつていふんですけれども、こういう⁽⁴¹⁸⁾現場の先生と大学の教員がコミュニケーションを図る環境をつくつていくというのはすごく大事なというふうに思っています。 実習ⅠとⅢというのは、せつかくの機会だから、種別を変えていきたいという学生、だから、Ⅰでは養護施設に行つたから、では、このⅢでは別の種別という学生と、やっぱり深めたいという。だから、Ⅰでは、行つても養護施設で、Ⅲでも養護施設だけれども、初めは大舎だったけれども、今度はグループホームとかというところで深まりを持つていくとか、学生の志向もあつたりするので、その⁽⁴²⁰⁾ⅠとⅢの関連をどういうふうに付けていくかということとあるので、指導もまた変わつていくのではないかなというふうに思いました。 生活の中に入つていくので、食事を作るとか、今、小舎になつていて。学生に食事を作らなくてはいけなくて、洗濯をしなくてはいけないとか。でも、それを大学がやるということとは、もうこれは不可能なんです。もうこれは大学と現場サイドは、お互いが今の学生たちの生活経験の少なさを嘆くのではなくて、そこを両者は、もうこういう現実というところで、その中でしつかりとお互いがそこを伝えていく。「何でできないの？」ではなくて、もうそういう経験をしてきていないという前提の中で、現場の先生たちにも一つ一つ伝えていたきたい。大学の中で、洗濯の仕方とかあいさつの仕方とか難しいからやらないうのではないで、そこで気付いたところで、しつかりと伝えていくことが大事で。 居住型施設だけれども、「うちは宿泊施設がないので、通つてきてください」という居住型施設の実習があつて、そこら辺はどうなのかなというのが一つある。⁽³⁹⁹⁾やつぱり生活を共にして、まさに寝起きを共にしていく中で、学生たちがそこに感じる。先ほど、自分らが学生に言うのは、最後は、「あと何日」とカレンダーを作るのを支えにしている学生もいるわけです。「もうこれしか支えはありません」という。しかし、「あなたたちは、後ろ、ラストが言えるよね。この子どもたちはラストが言えないんだよ。ラストが自分で言えるのは、もう中3を卒業するときに、『俺は自立する』という、この中3の卒業式は、自分で出ていく日には決められないんだよ」と。「あなたたちは、12日間というこの中で、ラストカレンダーを。けれども、では、この2歳、3歳、4歳ぐらいのこの子どもたちが同じ環境の中にボーンと入れられたこの不安、あなたたちが感じている不安感と、では、この子どもたちはどう感じていると思つていふの？」というところを、「⁽⁴⁰⁴⁾その不安感というのも、子どもの立場に置いたときに、しつかりと感じ取つてくることが大事なんだ」というようなことと、あと、子ども理解というところで、ある学生が帰つてきたときに、「私は、小学校低学年のこの子どもとは、8人の中で一番関係ができた

	ってきて、減らす、削る話がなかなかできていかなくて、大学と現場とか、あと学生の生活が窮屈になっていってしまう。どこか、⁽³⁸⁹⁾ゆとりを生み出す作業をやっていないといけない。実態として、保育士と幼稚園教諭は違っても、かなりの学生たちが一緒に受けているとすると、⁽³⁹⁰⁾その共通の科目はもう削るとか。あるいは、⁽³⁹¹⁾幼保連携型は、ちよつと施設の側の、幼保連携型の認定を整えて実習をしたら、保育士と幼稚園教諭の3分の2でいいとか。もう両方減ったんだから、時間を減らすというふうな大胆なことをやらないと。保育士と幼稚園教諭をベースにしていってやり続けると、やっぱり増えていき続けるのではないかな。だから、それで気を付けなきゃいけないのは、やればやるほど就学前が中心になっちゃうので、そこは⁽³⁸⁷⁾引き続きとして残しても、できるものだったり。⁽³⁹¹⁾保育教諭でのみの部分と、「保育士としても働きたい場合には、これは必ずやってください。そうしなければ、保育士の免許は、資格は出ません」というふうな構造にしていけないと、きつと負担ばかりが増えるのではないかな。
	思いました。だけど、帰ってくるときに、最後に、『てめえなんか帰っちゃまへ、帰っちゃまへ』と、ずっとホームをあいさつしたときについてきて言いました。私はショックでした。」「ちよつと待て」と、「ショックの前に、何でその子どもがそのあなたの後をついていきながら、『てめえなんか帰っちゃまへ』と言ったのか、その背景をしっかりと考えなさい」と。まさに考えるところですよ。これは、あなたはショックかもしれないけれども、なぜその子どもはそうしているのか、もしかしたら、乳児院から児童養護、そういう中で、泣き叫んで、『あなた、帰らないで』と言っても、みんな帰っていく。で、実習の先生は優しいから、みんな受け止めてくれたけれども、2週間で帰っていく。しかし、そういうことが繰り返され返り返りになってきたときに、⁽⁴⁰⁵⁾これは、自分自身の心を守るために、自分から切ったんだよ』と。いつも置いていかれていった自分、「あなた、さよならね」と言われてしまっていて、帰ってしまおう。自分はいつも置いていかれている。置いていかれたと。だけれども、そう返されていく中で、自分は傷つく。置いていかれたと。だけれども、そうではなくて、自分から切ったんだと。『あんなんか行っちゃまへ』と切ったんだと言いが、自分自身の心の傷をつけないようにやっているんじゃないの?』と。そういうことを考えたときに、『てめえなんか帰っちゃまへ』なんの?』と。その行動はショックでした』ではなくて、なぜそういうような行動になるのか。そうすると、子ども理解として、こういう施設の子どもたちは、⁽⁴⁰⁵⁾どういう背景の中で今があるのか、⁽⁴⁰⁶⁾その言動にはどういう意味があるのかということを考えるきっかけとしてあるんじゃないのかと。 こういった振り返りシートの中で、さっき、実習を通して、⁽⁴¹⁵⁾問題点、納得できない点、理解できない点とか、そんなことを書かせながら、教員と学生だけで共有しながら、しっかりと学生と話をするというようなことで、事後指導はやっぱり重要。事前指導では、本当に表面的なことしかできない。やっぱり体験をしていくのはすごく大事なというふうには思っています。 指導をしてくださる方と、そして実習指導を養成校でしている、そういうメンバーがこんなふうに相対して、⁽³⁹⁵⁾率直な意見を話し合えるということ、このこと自体が、まづ勉強になると、大事なことであったというふうに思います。 施設実習でいろいろとご苦労いただいているにもかかわらず、実際にその保育士資格というものを生かして、現場に就職をする学生の比率は大変低い。しかし、そこで経験したことの学びは、私もいつも思うのですけれども、やっぱり⁽⁴⁰⁷⁾人間が生きるということと<u>そのものを考える機会</u>がそれまでの学生の生活の中でなかったことが、この施設実習によって、もちろん経験する内容は個人差がありますけれども、やはり最も⁽⁴⁰⁸⁾人間として生きていく<u>上での希望</u>を施設実習で経験させていたということとはとても重要で、こういうような学生がやはりしっかりと事後指導をする中で、また今後ますます学生の状況は、やはり決して施設実習にふさわしいということよりも、その逆の方向に行くであろうということは予測されます。

子ども・子育て支援推進調査研究事業（厚生労働省）

平成 29 年度 保育実習の効果的な実施方法に関する調査研究

研究報告書

平成 30 年（2018）年 3 月

一般社団法人 全国保育士養成協議会
